學

社.

名古屋大学 学生部

石岡繁雄

○ 内部條件 … 外部條件　　を.タク物

○ 性のハイタイ → 資本主義社会の必然.
戦後

○ やはり効率か.　Σ<[redacted]にたいしてどう考えるか　必ず何かある筈.
適材適所.

○ 安心して生活出来るということが 能率を高める非常に重要な要素と考える

○ もうける時にもうけなければ損だ

間違いない商売というものはないから. どうして競争者がでて脱落するかもしれない. これは 搾取とか, 不道とかいうは無関係だから. もうかる時に不正でもしてもうけようとする. 又 ΣKO も使うことになる.

又新らしい発明がおきるかもしれない

↑

逆にこれが競争心となって世の中を進歩させる.

○ 不正をなくするため.

不正とは何の原因でおきるか: 内的理由 外的理由 せざるを得ぬ生活は必須

○ 考えれば考えるほど資本主義以外にはないような気がする.

○ 最も不合理を少くする方法について考えるより致し方なし

○ 共産主義も亦資本主義の一形態である(?)

○ 動物と人間との差とM.との差は如何(?)

1) 戦争の悲さん, モミジのような手が土に埋もれている. 原爆展

2) 世の中には こういう矛盾の社会を宿命とする, 或は これを利用し 或は 厭世観を感じる.

3) 原爆を考える人間の顔, 皆が幸福になれる道.

4) 中小企業のヒサンさ → インチキをやらずにおれぬ 何となれば いつ外的条件の変化によって生活の基をたたれるかもしれないから

○ Mは資本家と労働者とをみて 中小企業 小売商人に対して救を与えていない → Σは如何
(これに対して)

◎ 私の体験、私は 中小企業と 公務員とをやって来た。この比較
○ 金もうけ にあくせくする 人間の姿
○ おばあちゃん（見越）の話
　神様である 太陽様を 分析研究して、少しも そのために 生きさして
　もらっている 現在を ありがたいと 思はかない。そして 原子とか 分子とか
　さわいでいる、結局その バチが あたって そのために 人間は滅亡する。
5） ペニシリン きかなくなっても うんない。うると損をする
6） イギリス と 中国との 差
7） 資本家を 敵とみずにやる。→ 純理論的
8）動物（飼犬）を人間と平等にすることは出来ない → 動物と似た
　或は それ以下の 人間は どうなるか。文明人と 野バン人の定義。
10） 犬の方が 人間より上。…… 井上さん　　　野バン人と 動物 との 差が

○ 動物でも 巨の大きいものがある。人間でも小さいものがある。→ どうするか
　動物の 生活を 高める 必要は あるか。

○ 自分が 動物から はなれていることの 他への 証明が 即ち 生存競争であり
　この所を どうするか。
○ パチンコ → 家庭の 不幸　　　…… 見解の差
　　　　　→ 大衆ゴラク
○ アメリカの 発行 → ゾウ音
　　　　　　→ 防衛上 止むをえず
　不幸とは 何か。 幸ひとは
○ アメリカ 進駐を きらう 気持とは 何か。 無関心 とは 何か。

○ 生命をかけたような 山登りなどは どうなる。

○ 資本主義、長所……努力しなければ劣位に落ちるおそれがあるので、懸命に努力して文明を発達させる。

短所……○もうけるときにもうけなければどうして悪くなるか分らないのでインチキでもやる
○社会の害になることでもどんどんやる
○一人がのびることは他が落ちることになり運命的になって貧者がはびこる。
○

○故に長所を多くして短所をなくする社会機構が望ましい。

○マルサス……困窮することによってガンばって良い子孫をうます。

私は、私の政治的見解を明らかにしなければならない時があるかもしれないと思って、以下を記します。
私は「如何にすれば人間（動物までも考えたいが、これは無理だろうと思うので）の悲しみを少しでも少くすることが出来るか」というものの、社会に具体的にあてはまる方法というものを考えてみたい。つまりそういう社会が実現したならばどんなにうれしいだろうと思うからである。　私が共産主義を云々するのは、共産主義が資本主義よりも、私の理想により近いと思うからである。　30、3、7.
従って私は共産主義者ではない。私のいう理想主義者である

学徒の修学量を増加させることによって得られる

国家有用の人材の育成は 修学困難を（学徒から）軽減させることでなくて、軽減による（によって齎されるの）修学量の増加で

なくてはならない。~~即ち~~ 一般には 軽減が 自動的に 即ち 修学量の増加を意味するであろう

修学量の増加（の測定に）は 学業成績の向上~~となってあらわれる筈である~~（分）を測定するのが穏当であると

考えられる

修学量の増加は 経済的理由による修学困難を減少することによって得られ.

経済的理由による修学困難（の減少）は 学資の貸与によって得られる

$m = f(n)$

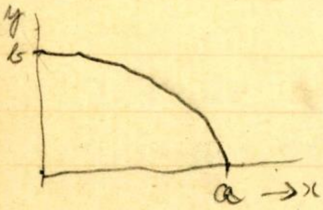
$n = Y - y$

$\left(\frac{x}{a}\right)^2 + \left(\frac{y}{b}\right)^2 = 1 \qquad \frac{x^2}{a^2} + \frac{y^2}{b^2} = 1 \qquad x^2b^2 + a^2y^2 = a^2b^2 \qquad \varepsilon = \frac{y}{Y-y}$

$a^2y^2 = a^2b^2 - x^2b^2$

$y = \frac{b\sqrt{a^2-x^2}}{a} = \frac{b}{a}\sqrt{a^2-x^2} \qquad y = \sqrt{r^2-x^2}$

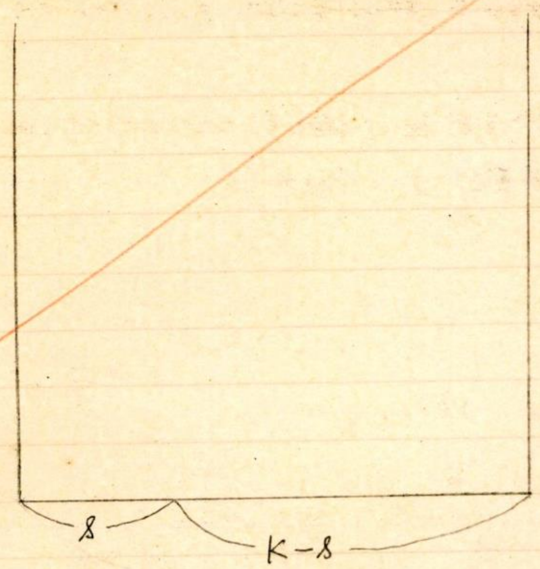
$\frac{dy}{dx} = -2x \cdot \frac{1}{\sqrt{r^2-x^2}} = \frac{-2x}{y}$



$y = \frac{b}{a}(a^2-x^2)^{\frac{1}{2}}$

$\frac{dy}{dx} = \frac{b}{a}(-2x)\frac{1}{\sqrt{a^2-x^2}}$

⑧ 修正因数 ということには 不足額の大小 及び 不足額をうるための 手段の 難易が関与する と考えてよい



$y=$

$$\varepsilon = f(x)\cdot\varepsilon_K = f(x)\cdot\frac{dy}{ds}\cdot\frac{dp}{dy}\cdot\frac{dm}{dp}$$ 但し $0 \leq f(x) \leq 1$ ……… (1)

$$E = \frac{\int_0^S f(s)\,ds}{S}$$ ……… (2)

$$\frac{dm}{dp} = k_3$$ (k_3 は比例常数) ……… (3)

$$\frac{dp}{ds} = \frac{dp_1}{ds} + \frac{dp_2}{ds}$$ ……… (4)

$$\frac{dp_2}{ds} = \frac{dt}{ds}\cdot\frac{dp_2}{dt}$$ ……… (5)

$$\frac{dp}{ds} = (1+k_2)\frac{dp_2}{ds}$$ ……… (6)

$$\frac{dt}{ds} = -\frac{1}{d}$$ ……… (7)

$$t = \frac{S_2}{d}$$ ……… (8)

$$K = S_2(1+k_2)$$ ……… (9)

$$\frac{dp}{ds} = (1+k_2)^2\left(-\frac{1}{d}\right)\left(\frac{-t}{p-p''}\right) = (1+k_2)\cdot\frac{1}{p-p''}\cdot\frac{K}{d^2}$$ ……… (10)

$$\varepsilon = f(x)\cdot\frac{dm}{ds} = f(x)\cdot\frac{dp}{ds}\cdot\frac{dm}{dp} = k_1(1+k_2)\cdot\frac{f(x)}{p-p''}\cdot\frac{K}{d^2}$$ ……… (11)

$$\varepsilon = k_1(1+k_2)\cdot\frac{x}{p-p''}\cdot\frac{K}{d^2}$$ ……… (12)

育英会法の実施方法について

これから考察しようとすることは 育英会法そのものについて云々することでなくて 育英会法の主旨なり 育英会法中に含まれるとみなされる思想なりを いかにすれば最も忠実に反映するような実施案をつくりだすことが出来る~~れる~~かという ことについて である。従って育英会法以外の例えば育英会規定などは次に考察のよりどころとなる根本の~~仮設を設定するために、育英会法に含まれる具体的事項で 互に一つから他を導きすることの出来ない独立した事項を抽出してみる~~（でなければならない）
（必要な事項を抽出してみる（これらは……）

以というものには ここでは拘束されないことにしておく

育英会法は本項の末尾に記すが ここでは（考察の便宜上）本考察にあたって最も重要な第一条を記~~述ととどめる~~しておく。勿論育英会法の表現のみを云々することは或は未精確なおかしいかもしれない（倘し）の考察も常に関係にのべてある）他によりところがないのであるから、今は育英会法の

育英会法 第一条 「優秀なる学徒にして経済的理由により修学困難なる者に対し学資の貸与その他これが育英上必要なる業務を行い以て国家有用の人材を育成することを目的とす」

I. 優秀なる学徒 ---- これは学徒であること（Ia）と 優秀であること（Ib）とが含まれる

II 経済的理由により修学困難なる者 ---- これには修学困難であること（IIa）と その理由が

III 経済的なものであること（IIb）とが含まれる

学資の貸与は（資格者と）上記 I, II において $x \geqq X'$, $y \geqq Y'$ の両条件を満足する者をいう。 奨学金貸与 資格の度合を z とすれば z の値は x, y から算出される
（即ち $z = f(x, y)$ となる故に z の値は x, y のほか（三者の関係即ち $f(x, y)$）方式の内容が明らかにされることが必要である。この内容については育英会法は具体的な指針を与えていない と考えられるので ある仮設をおいて考察をすすめなければならないように考えられる。尚若し I, II, III が夫々明確となったとしても（貸与）貸与資格者と

III. 学資の貸与資格者には 学資が貸与される可能性がある（或は貸与されなくてはならない）が 学資を貸与するためには 貸与額を決定せねばならない（決定された貸与額をもとにする）貸与額の算出には（ただ機械的に貸与することは出来ないと考えられるので適当な 貸与額をきめずに）上記 IIIの（奨学生の資格が明らかにされるのみでは不充分である。又 貸与可能の額は無限にあるわけではないので 少くとも需要と供給の関係が明らかにされなくてはならない 即ち 貸与可能の国家予算（IIIa）（貸与額の決定には）と 貸与資格者の（そういった関係の）綜合された状況（IIIb）が明らかにされなくてはならない

V. 育英会法は「国家有用の人材を育成することを目的」としているので（貸与によって）どれだけ目的が

画像指定

内容的に解釈される 一つは学問をする者で 他は学校に在学する者, 実に大学等は 両者含めて学徒といってもよい
大学に在学する者を学生, 他を生徒という

I 学徒とは学問

II, 学徒であることは, 学徒であるか ないかであって, どちらの範囲内においてもお互の間に区別はない 本考察の範囲において

優秀であることは, 優秀な素質ということに解釈する, 素質は人間一人一人固有のもので 変化

しないものであるとしておく 又 国家有用の人材となりうる 潜在要素と考えられ

ものでその評価は 前記学徒と異ってお互の間に区別はするもので 連続であることも可能である 今この評価を x と し $X \geq x \geq 0$ であるとする

これは次にのべる修学困難とも関係があるので併びのべることにするか

~~[illegible]~~する $x=0$ とは 低能であり $x=X$ とは, 可能な最大の素質ということになり

$x=0$ から 増大するにつれ 劣等生, やや劣る, 普通, 良好, やや優れている, 優秀, 非常に

優秀, 天才 というようになってゆくのであり ~~本~~ 奨学会法のいう 優秀とは ~~大凡~~ 上記のような

位置に存在しているわけである 今この値を X' としておく

II 修学困難は x と同様 評価は連続しているとみてよい 今この値を y とすれば $0 \leq y \leq \infty$ の範囲に

ある $y=0$ とは 修学困難のない状態であり $y=\infty$ とは 修学不可能な状態としておく

修学困難のうち 経済的な理由のものを y, 経済的以外のものを y' とする

y は y の増大にともなって 修学にやや支障がある, 支障がある, 困難, 不可能となるわけで

~~[illegible]~~ あり 奨学会法の修学困難とは大凡 上記の位置にあり この値を Y' としておく

[illegible]

P

[illegible]的に 分類することは 可能である, 例えば 値の大きいものは 小さい者に比して 具体的に どういうことになる

かという点については 至って明瞭である

この算出が 奨学会法実施に関する 最終目的と考えてよい, 尚 予算の決定

3月13日(日)の晩三朗の夢を初めて見た。東大生が救出したというのである。仮死状態であったが手当の結果助かったという通知をもらったのである。そんな馬鹿なことがあるものかと完全に否定していたが間もなく三朗が元気な姿で帰ってきた。右手が全部くっついて白くなっていたが元気に笑っていた。いつもの三朗そのままでびっくりした。併し私がそんな馬鹿なことはない、と腹の中で大声で叫んでいたが、やがてそのまま目がさめ、やっぱり夢だったと本当にがっかりした。

先日の夢は殿様のそばにいて名人が一方の目だけ動いたマ、カンジキより[illegible]が飛んできた → 単に珍らしい夢

3月22日(月)の晩三朗の夢をみた。雪の(ブロック(屏風状態のような)の中を皆でさがしていたが松ちゃんがみつけた。相当いたんでいたが毛の生えぎわ、靴(片方のみ)等で確認。ザイルはなかった。皆で悲しがった

~~達成されたか即ち目的達成度が明らかにされることが必要となる。明らかに目的達成量が皆無であるような給与は考えられないからである。(たとえ有資格者といえども)~~

~~ある個人に給与される金額(s)、それによってなされる目的達成量(m)、給与額の総計(S)、目的達成量の総計(M)等が必要となる。育英会法の実施に当っては s の決定が最終目的となり、国家予算 A の決定には $\frac{M}{S}$(効率 E と呼ぶことにする)が重要な因子になると考える。(資格と効率との関係は次記)~~

総合

s

x, y: 学徒の思想

次の論点について考察する。

1) 国家金銭(~~育英会法~~)は給与という犠牲の代償として国家有用の人材を育成するという目的をもっている。それならばこの目的にかなうような給与ならば方法は何でもよいかというとそうではなく、育英会法には目的達成までの経過が示されている。(例えば報償という観念はない) 即ち次の順序によるものと解したい。

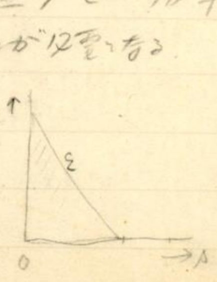
給与(s)によって経済的理由による修学困難の者の支障の割合の減少(y)がおこり、その減少が修学者の学業の増加(x)をともない、その増加が国家有用の人材育成量(m)の増加をともなう。

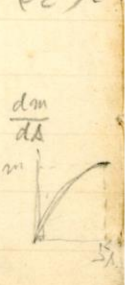
金額(~~[illegible]~~投資)と目的達成量との比(収益)を効率(ε)とすれば $\varepsilon = \frac{m}{s}$ となる。これが次の順序であることが必要になる

$$d\varepsilon = -\frac{dy}{ds} \cdot -\frac{dx}{dy} \cdot \frac{dm}{dx}$$

$\frac{m}{s} > 0$ であるので $d\varepsilon = -\frac{dy}{ds} \cdot -\frac{dx}{dy} \cdot \frac{dm}{dx} > 0$

となり $-\frac{dy}{ds} > 0$, $\frac{dx}{dy} > 0$, $\frac{dm}{dx} > 0$ が必要となる





同様にして上記のことから 学生の資格に関する言葉の定義を次のように定める

優秀なる学生とは そうでない学生に比し 将来国家有用の人材となりうる潜在能力をもつと考えられるもの（素質）

授業とは

上記を逆にいうと，ここでいう修学とは m の増加をもたらすものをいい，y の減少とは（それによって）m が増大するものをいい，x とは y の減少をともなうことが必要である．

2) 修学とは ただまんぜんと（机にむかっていたり）本をながめたりしていたりすればよいというのでなく（国家有用の人材育成に役立つような）

ことは当然である 国家有用の人材の原因となるような（修学を行うだけの）（意欲と能力の綜合）潜在力をもっている者が ※，

~~修学出来うる状態におかれたとき 国家有用の人材育成に必要な修学量が~~

~~得られると考えることが出来る~~

~~国家有用の人材となる潜在力を持っている者は（意欲と能力との綜合）必ず国家有用の人材となる~~

~~かといえば~~（修学しうる）そうでなく それをさまたげるものがあれば（修学量をともなう減少する）※

（y） 厳密に考えれば

$\frac{dm}{dy}$ について，修学の中には（された量）国家有用の人材を育成するのに役立つものとそうでないものとがあると考えられる，

4 了今の状況についての仮設，

（m）

V （目的は）国家有用の人材になればよいのであって，その人物が実際にどれだけ国家に有用になるかということとは ~~直接の関係がない~~ 別問題である

◎ 目的達成を確実ならしめるために $x \geq \bar{x}$，$y \geq \bar{y}$ でればよいと考えられる．

◎ 一般常識でも ~~$y \geq \bar{y}$ が~~ y の増加にともなって有効度は大きくなると考える．

修学（が増すにつれて）~~…~~ 必ず m も増大するが その増大分は減少しやがて 0 となる，修学を増加しても m の増大をきたさない場合には，その増加分の修学は（について）目的達成度が効率 0 ということになる．日本そのような修学を考えられない 但し，（実際には）それはある巾をもったものの平均であると考えればよい

$$\frac{dm}{ds} = k(K-s)$$

$$dm = k(K-s)\,ds$$

$$\int \quad m = k\int_0^K (K-s)\cdot ds = k$$

$$= k\left[Ks - \frac{s^2}{2}\right]_0^K + A$$

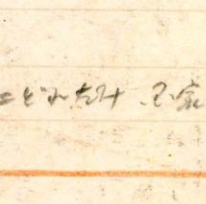
$$= k\left[K^2 - \frac{K^2}{2}\right] = k\frac{K^2}{2}$$

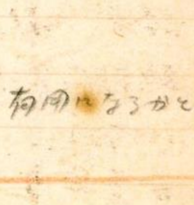
$$m = kKs - k\frac{s^2}{2} + A$$

$$\frac{dm}{ds} = kK - ks$$

$$= k(K-s)$$

$s = K$; $kK^2 - k\frac{K^2}{2} = k\frac{K^2}{2}$





効率，x，y

総合点，

いかなる従事も効率を考える必要がある

効率（目的達成度／従事者）

2) 目的達成という点から考えれば 当然 効率（目的達成度／従事者）~~か内容~~を高める ~~...~~ 或は従事者が限定される場合には ことが大切~~である~~となる。但し このことと 従事資格とは どのような関係にあるだろうか

奨学会法が 従事資格を 1)学徒 2)優秀 ~~である~~ な青年 3)経済的理由による修学支障の存するが 相当進んで困難している程度でなければならないこと を限定した理由を考えてみるのに、戦後の国力から考え（日本の現在の社会情勢） 到底 優秀な学生の全部を援助するだけの力がないので ある種の制限を設ける必要があると考えた。この場合 制限の基準を何においたらよいであろうか 上記三つの制限、及び 目的~~達成~~を（当然のことながら 同法に明記して）~~...~~いる点から考え、又 ~~常識から考えても~~

従事が現在の経済情勢においてなされることを考えても 又常識的にも この基準を 効率において考えるのは妥当ではなかろうか（少くとも之れに関連がなくてはならない）次に夫々について考えてみよう

1) 学徒 後で述べるように 効率は 学徒（同法の目的を 大きく達成すると思われる者） 学徒でなくても 習学の志があって ~~...~~ 従事によって ~~効率の大きい者は~~ 即ち（優秀な青年の者もおり）

効率の高い者は いるであろう 但し これを学徒に制限してしまった理由は ~~...~~ 優学者が 必要であるが 学籍のない 独学者には この評価が困難で（不当な）（効率の者おれば）

ある 即ち もしも 君が 上記の者に 従事させたら ならば 優学者 評価の上で その 選力に全く困惑してしまうであろう 即ち 全体（効率）としてみた場合 こういう特例は 犠牲にするより致し方ないと思う。

2) 優秀な青年… 優秀でない青年の学徒でも 優秀の者に 従事させれば 必ずや 若干の目的達成度はあるであろう。但し 従事に区別を設けたのは 同一従事経費においては 優秀な者に従事させた場合ほど 目的達成度が大きい 即ち効率（で同一 が大きい）を考慮されたのだと考えたい ~~即ち効率を~~ ~~尚この場合には~~

尚 優学者は 優学的傾向と 学徒の優秀性とに 関連があると考え ~~...~~（効率と深い関係をもつ） 上記のことは 妥当~~である~~性が多い。

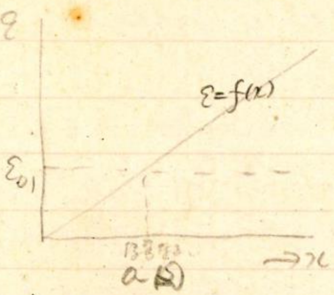
3) 学資が小さいときは、例えば 映画をみる傾向が強いとか 修学に支障があるという者は、これに従事しない方が 目的達成度は 大きい場合も考えられるのである。即ち ゴウクベンして それによれば 一層 奮起する可能性 ... 従事させれば、かえって甘えることになりやすい

$\varepsilon_0 > \varepsilon_{01} \cdot \varepsilon_{02}$ or $\varepsilon_0 = (\varepsilon - \varepsilon_{01})(\varepsilon - \varepsilon_{02}) > 0$

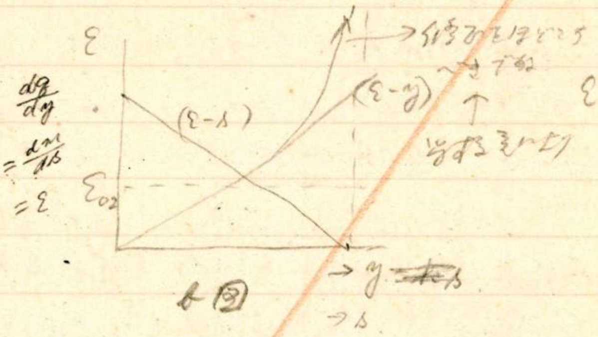
$\varepsilon = f(x, y)$ の内容規定について
ヒントはなきや

併し y が進んで田数の7%となると ~~[illegible]~~ 上記のようなことはいっておれなくなろう
このような者への貸与は間違いなく 借方者の増加と云うより 回収速度の増加と みなして さしつかえない
ように思われる。即ち y が小のうちは 効率は あいまいであるかもしれないが y が
増加すれば 効率は 確定的と なってくるのである

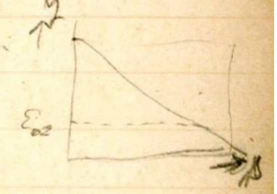
(上記の考えからすれば)
要するに 効率と 資格との 内係は 資格の 高い者ほど 効率は大きい ということになる



$\frac{d\varepsilon}{dy} = \frac{dm}{ds} = \varepsilon$



$\varepsilon = \frac{m}{s}$

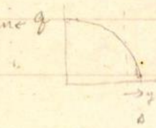


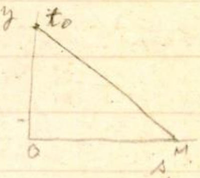
この b図は 大切である。もし 貸与額と y とが ~~直線的内係にあれば~~ $\frac{d}{ds}$
ある内係式にあるとすれば 例えば y を大とすれば

$\frac{m}{s} = K - s$

しかし 吾々は 資格がある者以下の者には　$m = sK - s^2$
貸与しない 即ち 効率が高いとみなされる者にのみ 貸与する。と考えているわけ
である

$m = sK$





$y = -\frac{t_0}{M}s + t_0$
$= \frac{t_0}{M}(M - s)$

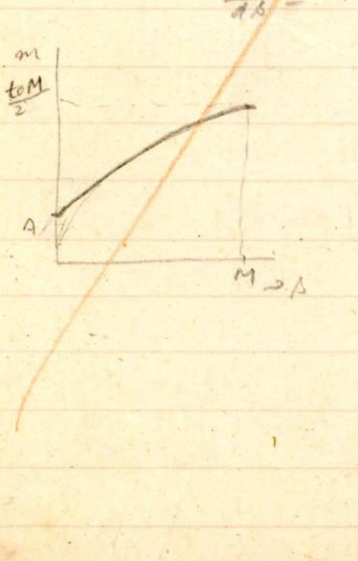
$\frac{dm}{ds} = k_1 x$　　$\frac{dm}{ds} = ky$

$\frac{dm}{ds} = K - s$

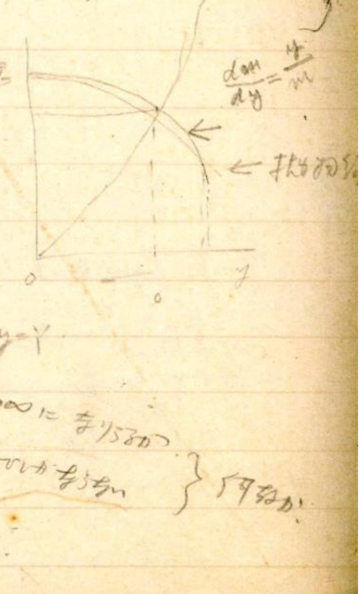
$\frac{dm}{ds} = \frac{t_0}{M}(M - s)$

$m = t_0 s - \frac{1}{2}\frac{t_0}{M}s^2 + A$

$\frac{dm}{ds} = s$　　$m = \frac{1}{2}s^2$



$\frac{dm}{dy} = \frac{t_0}{M}$



$y = Y$

こちらでは $\frac{dm}{ds} \to \infty$ になりうるか
こちらでは $\frac{M}{2}$ までしかならない } 何故か

綜合効率は 個々の効率の積であらわされる

$(g-y)$ 曲線を 楕円とせず, $\frac{dg}{dy}=K(a-y)$, $g=Kay-\frac{1}{2}Ky^2$ とする

~~給与が~~ 給与する際の資格が 相当な程度まで 進んでいる者に (学資が) 給与された場合は

その給与は 育英会法の 目的に そう ~~これが出来る~~ とみなすことが出来る 即ち ~~育英会法に さからわない~~

(国家有用の人材の育成費をもつと みなしうる 即ち 逆に y が Y にまで 進んでいない者

に学資が 給与されても 育英会の目的は 達せられない

~~これを給与額にいえば~~ → それによる国家有用の人材育成(費)では 不充分である

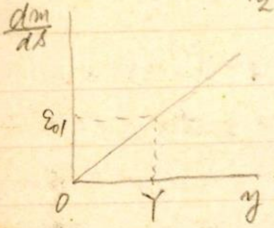
(があるとは考えられない 或は それ位

給与額は 資格の給与額についてのみ いえることであって

尚 (給与資格をもつ者でも) ある大きさの額が 給与可能かどうかは わから

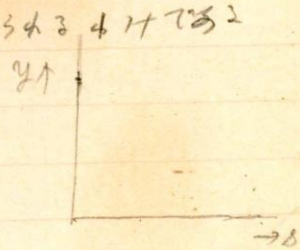
ない 何となれば いかなる給与も それによって 給与資格

を変化させるからである, 即ち 給与後の 資格が 尚 ~~資格~~ 適格



→ 効率が ε_{01} 以下では 給与には 不充分である

であれば 更に 額の給与が 与えられるわけである

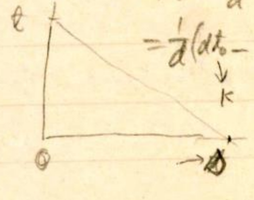


$$\varepsilon = ky$$
$$= \frac{k}{d}(K-s)$$

$$\varepsilon = (\varepsilon_1-\varepsilon_{01})(\varepsilon_2-\varepsilon_{02})$$
$$= k_1(x-X')\,k_2(y-Y')$$

$$\varepsilon = \varepsilon_1\varepsilon_2 = k_1 x\cdot\frac{k_2}{d}(K-s)$$
$$= kx(K-s)$$

$$\frac{dt}{ds} = -\frac{1}{d}$$
$$t = -\frac{1}{d}s + t_0$$
$$= t_0 - \frac{s}{d}$$
$$= \frac{1}{d}(dt_0 - s)$$

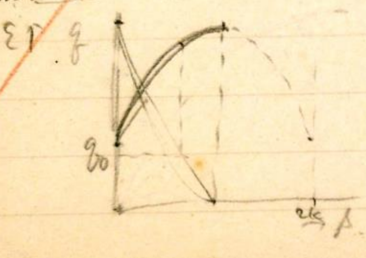


$$\frac{dg}{ds} = \frac{dm}{ds} = kx(K-s)$$

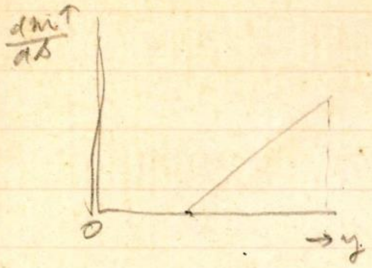
$$g = \frac{1}{2}kx(K-s)$$
$$= kKxs - \frac{1}{2}kxs^2 + g_0$$

$$y = \frac{1}{d}(K-s)$$

$$t_0 = \frac{s}{d}$$
$$s = t_0 d$$

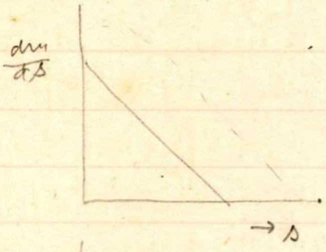


$$ks\left(K-\frac{s}{2}\right)$$



$m_1 = k_1K_1s_1 - \frac{1}{2}k_1s_1^2 + m_{01}$

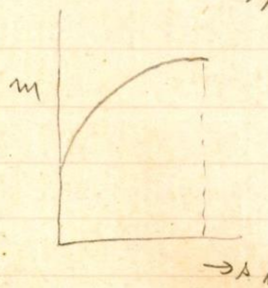
$m_2 = k_2K_2s_2 - \frac{1}{2}k_2s_2^2 + m_{02}$



$m_1+m_2+\cdots = k_1K_1s_1 + k_2K_2s_2 + \cdots - \frac{1}{2}(k_1s_1^2 + k_2s_2^2 + \cdots)$

$s_1+s_2+\cdots = A$ の條件のもとで

$m_1+m_2+\cdots = M$ を最大にせよ

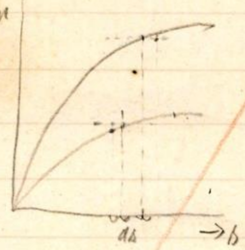


~~若し~~ 今 これが可能であるような $s_1, s_2 \cdots$ が得られたとする

~~今 微小資源 ds を s_p で増し s_q で減じたとし 見て~~

任意の資源(A B)二つの夫々の (ε-s) 曲線は

図のようであり 供与額は夫々 s_a, s_b であったとする

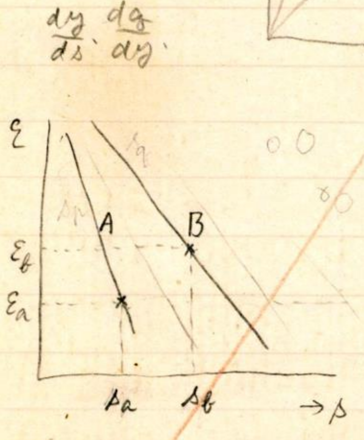


今 Aに微小の資源 ds を増し Bから ds を減じたとする, その時における A の目的達成度の増加は dm_a で B の減少は dm_b である

仮定から $s_1+s_2+\cdots = A$ のもとに $m_1+m_2+\cdots = M$ は最大であるから $dm_a - dm_b < 0$ でなければならぬ

即ち $\frac{dm_a}{ds} - \frac{dm_b}{ds} < 0$

$\varepsilon_a - \varepsilon_b < 0$



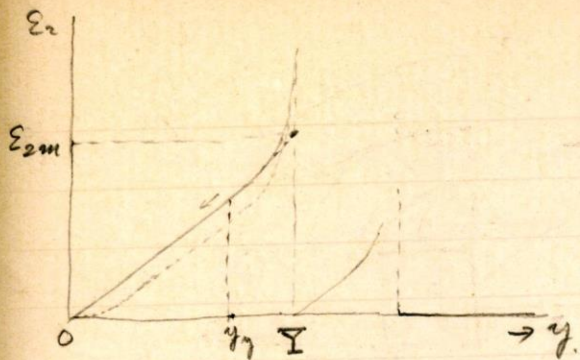
同様にして Aから ds を減じ Bに ds を増したとしても

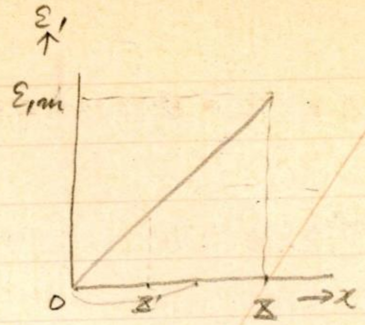
$dm_b - dm_a < 0$

故に $\varepsilon_b - \varepsilon_a < 0$

故に $\varepsilon_b = \varepsilon_a$ であることが必要となる

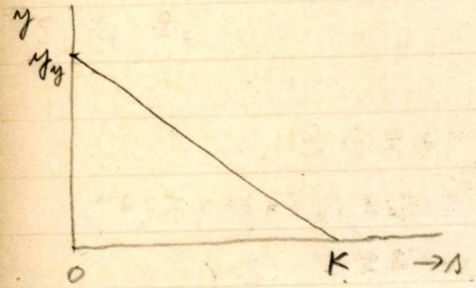
故に 上記條件を満たす ~~ような供与は~~ ために は, ~~夫~~ 夫々の資源に供与した後の効率が等しいことが必要である, この効率を限界効率と称することにする



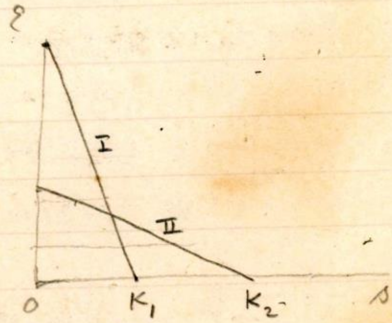


$$\varepsilon_2 = \frac{\varepsilon_{2m}}{Y} y \quad \text{------} \quad (2)$$

$$\varepsilon_1 = \frac{\varepsilon_{1m}}{X} \cdot x \quad \text{----} \quad (1)$$



$$y = -\frac{y_y}{K} s + y_y \quad \text{----} \quad (3)$$



(3) を (2) に代入

$$\varepsilon_2 = \frac{\varepsilon_{2m}}{Y}\left(-\frac{y_y}{K} s + y_y\right)$$

$$= \frac{\varepsilon_{2m}\, y_y}{Y\ K}\left(K - s\right)$$

$\frac{\varepsilon_{2m}\, y_y}{Y K} = k$ とおけば

$$= k\left(K - s\right)$$

$s = 0 \quad \varepsilon = xy$

$s = K \quad \varepsilon = 0.$

$$\varepsilon = \varepsilon_1 \varepsilon_2 \quad \text{------} \quad (4)$$

故に $\varepsilon = \varepsilon_1 \varepsilon_2 = \frac{\varepsilon_{1m}}{X} x \cdot k(K - s)$

$$= \frac{\varepsilon_{1m}}{X} \cdot \frac{\varepsilon_{2m}\, y_y}{Y \cdot K} \cdot x \cdot (K - s)$$

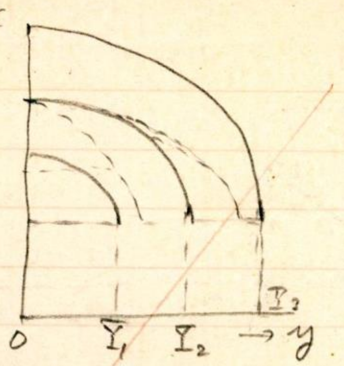
$$\frac{1}{X} \cdot \frac{\varepsilon_2 \cdot y_y}{x \cdot K}\, x (K - s) = x \frac{y_y}{K}(K - s)$$

$\varepsilon_{1m} \cdot \varepsilon_{2m} = 1$

$\frac{x}{X} = x\%, \quad \frac{y_y}{Y} = y\%$

$$= \frac{x \cdot y}{K}(K - s)$$

Ⅴの値は x の函数としてあらわれる, $\underline{xw}$



y を $\frac{dq}{ds}\times k$ で測定することについて

$$\frac{xw}{y_0+y}$$

$x,\ n,\ y$

$\varepsilon = \cancel{x}\cdot\varepsilon_1\,\varepsilon_2 = x\cdot$

修学函数とは $\frac{dq}{ds}$・ではないか

経済的理由による修学函数は 次のように定義づけることが出来ると思う

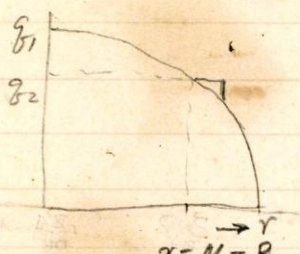
即ち もし充分な学資が(生活)(S_1)あれば、たとえば 1ヶ月間に或る程の修学量(q_1)を得られるのであるが

学資が充分にないためには(S_2) それだけの修学量をうることが出来ない(q_2)

故に 学資を与えても修学量が増加しない者は

学資の減少が修学量の減少をともなわないとき 経済的理由により修学函数はないとする

充分な修学量を得ようとしても 経済的理由により得ることが出来ない



学資の減少がともなわなくても q の大小の関係がある 即ち s に

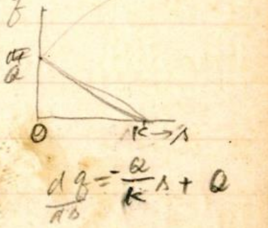
y が無限大とは

而し q が不連続の場合

6000, −4500 = 1500

$$y = -\frac{dq}{dr} = -\frac{ds}{dr}\cdot\frac{dq}{ds} = \frac{dq}{ds}$$

$\varepsilon = x\cdot q_2$ $\quad \varepsilon_2 =$



$$\varepsilon_2 = k_2 y = k_2\left(-\frac{dq}{dr}\right), \quad \varepsilon_1 = k_1 x,$$

$\varepsilon = \varepsilon_1\,\varepsilon_2$

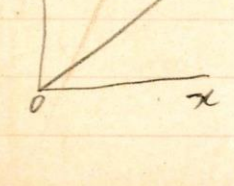
$= k_1 x\cdot k_2 y$

$r = M_2 - R \mp s$

$$= k_2\frac{dq}{d(M_2-R+s)}$$

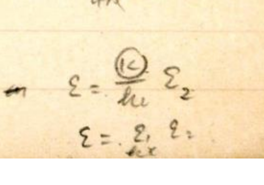
$$= -k_2\frac{ds}{dr}\cdot\frac{dq}{ds}$$

$$\frac{ds}{dr}\,\frac{dq}{ds} = -\frac{Q}{K}(K-s)$$



$$= -k_2\cdot -\frac{Q}{K}(K-s)$$

$$= \frac{k_2 Q}{K}(K-s)$$



$\frac{dq}{ds} = -\frac{Q}{K}s + Q$

$\frac{dq}{ds} =$

$\frac{dm}{dq} = K \qquad = k_2$

$$\varepsilon = \frac{dm}{ds} = \frac{dq}{ds}\cdot\frac{dm}{dq} = \frac{dq}{ds}K$$

$$\frac{dq}{ds} = \frac{\varepsilon}{K}$$

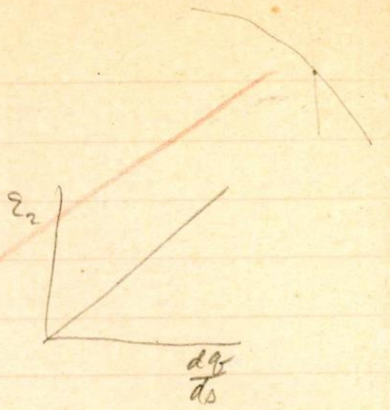
$\varepsilon_2 = k_2\frac{dq}{ds}$

$= k_2\frac{\varepsilon}{K} \leftarrow \varepsilon = \frac{K}{k_2}\varepsilon_2$

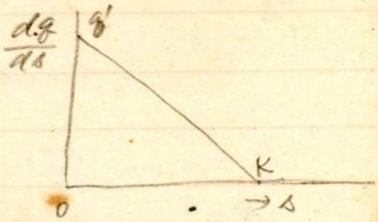
$\varepsilon = \frac{\varepsilon_1}{k_1}\varepsilon_2$

$$\varepsilon = x\cdot\varepsilon_2$$
$$= x\cdot\frac{k_2 q'}{K}(K-s)$$
$$= \frac{k_2}{K}\,x\cdot y\cdot(K-s)$$

$$y = -\frac{dq}{dr}$$
$$= -\frac{ds}{dr}\cdot\frac{dq}{ds}$$
$$= \frac{dq}{ds}$$



$$\varepsilon_2 = k\,y$$
$$\varepsilon_2 = k\cdot\frac{dq}{ds}$$
$$= \frac{k q'}{K}(K-s)$$

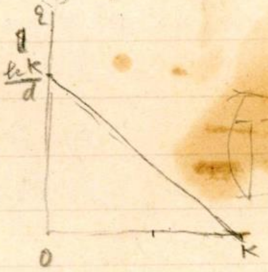


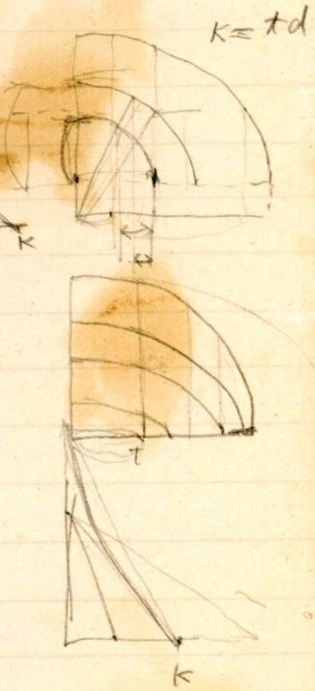
$$\frac{dq}{ds} = -\frac{q'}{K}s + q'$$
$$= \frac{q'}{K}(K-s)$$

$$\varepsilon = x\cdot\varepsilon_2$$
$$= \frac{k}{K}\cdot x\cdot q'(K-s)$$
$$= \frac{k}{K}\,q\,(K-s)$$
$$= \frac{k}{K}\,t(K-s) = \frac{k}{d}(K-s)$$

$$\varepsilon = \frac{x}{n-p''}\cdot\frac{K}{d^2} = \frac{x}{n-p''}\cdot\frac{t}{d}$$

$K = td$





他の条件が同じとすれば

◎ 修正困難は 優秀性の少い者ほど 大きい

もしこれを数式で表せば Σ' の関係

もし時間給が同じならば 予定額のみに比例する.

同じ 50^h の 就業時間で 甲は 優秀で Z は そうで なかったとする 効率は 等しいことになる → 多少差はある

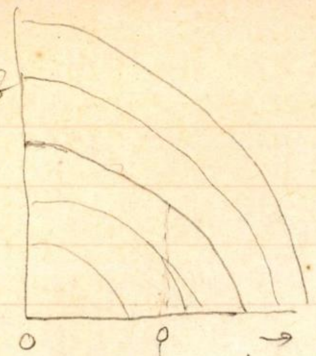
故に効率は $50h$ となるが それでは 測定誤差が大きくなる 心配があるので $\varepsilon = \frac{k}{K}\cdot x\cdot q'(K-s)$ としておく

次にもっと詳しくやる

今 x と y との関係を考える

従属数 Oa とせの, 即ち現状における作用角を $y = \frac{dg}{ds}$

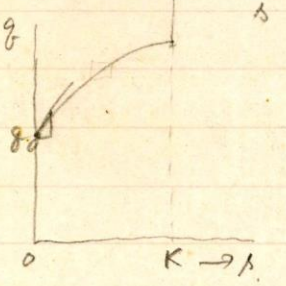
とする

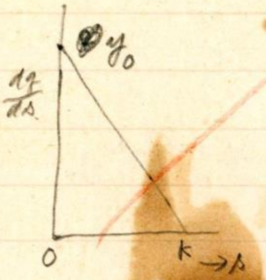


$$\frac{dg}{ds} = -\frac{y_0}{K}s + y_0$$

$$g = y_0 s - \frac{1}{2}\frac{y_0}{K}s^2 + g_0$$

$$= \frac{y_0}{K}s\left(K - \frac{1}{2}s\right) + g_0$$





$\varepsilon = f(x, y)$

$=$

$f(x)$

(1) $\xi = k_1 x$ 但し $x > \mathrm{I}'$ とす

(2) $\xi = k_2 y$ 〃 $y > \mathrm{I}'$ 〃

(3). 常数

(4). yは 使用数の増加により減少する. $y = f(s)$. とする $s=0$ のときの yの値を y_0とする

(5). $\xi = \underbrace{\left(-\frac{dy}{ds}\right)\left(-\frac{d\xi}{dy}\right)}_{\frac{dm}{ds}=} \cdot \frac{dm}{d\xi} =$

(6) 予算を Aとする

目的を 適正(営業会計の組合に合致する) 使用数の 算出とする.

仮設 (1) (2) から

$$\xi^2 = k_1 k_2 x y \text{ - - - - - -}$$

仮設 (2) (4) (5) から.

$$\frac{dm}{ds} = k_2 y$$
$$= k_2 f(s)$$

$$\frac{dm}{ds} = \sqrt{k_1 k_2 x y} = \sqrt{k_1 k_2 x} \cdot \sqrt{y} = k_i'$$

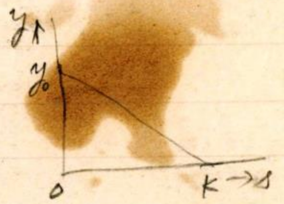
$$m = k_2$$

故に $m = k_2 \int f(s)\,ds + A$

$s=0$ のときの mの値を m_0. 適正使用額をs_1 とすれば

使用による目的達成量 m_1 は

$$m_1 = k_2 \int_0^{s_1} f(s)\,ds$$



$y = f(s)$ の内容を. 例へば 最も簡単な(減少の)形にとり $y = -\frac{y_0}{k}s + y_0 = \frac{y_0}{k}(k-s)$ と

すれば

$$\frac{dm}{ds} = \frac{k_2 y_0}{k}(k-s) \qquad = k_2 y_0 - \frac{k_2}{k} y_0 s$$

$$m = \frac{k_2}{k} y_0 \left(ks - \frac{1}{2}s^2\right) + A \qquad m = k_2 y_0 s - \frac{k_2}{2k} y_0 s^2 + A$$

故に 使用による 目的達成量 m_1 は

$$m_1 = \frac{k_{21}}{k_1} y_{01} \left(k_1 s_1 - \frac{1}{2}s_1^2\right)$$

各部の予算について

$$m_2 = \frac{k_{22}}{k_2} y_{02} \left(k_2 s_2 - \frac{1}{2}s_2^2\right)$$

$$m_1 + m_2 + \cdots = \frac{k_{21}}{k_1} y_{01} \left(k_1 s_1 - \frac{1}{2}s_1^2\right) + \cdots$$

適正給する額は次の條件であったとする

$s_1+s_2+\cdots=A$ (一定)の條件のもとで $m_1+m_2+\cdots=M$ を最大ならしめるような $s_1, s_2\cdots$

をもって適正給与額とする

一般に ε が y の増加と共に減少するからの方程式にあっては

今上式の $s_1, s_2\cdots$ が上記條件を満足していたとする。

今 任意の学徒 p の 適正 給与額 s_p (目的達成量を m_p とし s_p) から 微少の額 ds を減ずる (するとすれば 目的達成量は dm_p 減ずる), 他の任意の学徒 q の

適正給与額 s_q (m_q とし s_q) に ds を増すものとする。この時の目的達成量の増加を dm_q とする。

しかるときは 給与額の総計は A であって変化しないが目的達成量の

合計は仮説から $m_p+m_q \geq (m_p-dm_p)+(m_q+dm_q)$

故に $dm_p \geq dm_q$.

次に p に ds を増し q から ds を減じても同様であるから

$dm_q \leq dm_p$.

即ち $dm_q=dm_p$ であることが必要である。

即ち $\frac{dm_p}{ds}=\frac{dm_q}{ds}$ となる。同様にして $\frac{dm_1}{ds}=\frac{dm_2}{ds}=\cdots=\varepsilon_0$ (限界効率) とする

即ち 上式の微係数は 凡て等しいことが必要である

今この

$\frac{k_{21}y_{01}}{k_1}(k_1-s_1)=\varepsilon_0 \quad \therefore s_1=k_1-\varepsilon_0\frac{k_1}{k_{21}y_{01}}$

$\frac{k_{22}y_{02}}{k_2}(k_2-s_2)=\varepsilon_0 \quad s_2=k_2-\varepsilon_0\frac{k_2}{k_{22}y_{02}}$

$s_1+s_2+\cdots=(k_1+k_2+\cdots)-\varepsilon_0\left(\frac{k_1}{k_{21}y_{01}}+\cdots\right)$

$\therefore \varepsilon_0=\frac{(k_1+k_2+\cdots)-A}{\frac{k_1}{k_{21}y_{01}}+\cdots\cdots}$

従って $s_1, s_2\cdots$ を求めることが出来る。

次に

$\varepsilon=\frac{dm}{ds}=\frac{k_2y_0}{k}(k-s)$

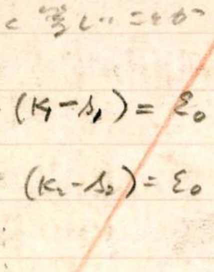
$\varepsilon=k_1x$

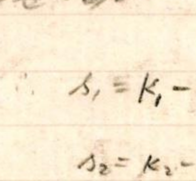
$\varepsilon^2=k_1k_2xy_0\cdot\frac{1}{k}(k-s)$

故に x, y_0, K, k_1, k_2 の具体的測定を考えることとする

$y_0=\frac{dg}{ds}$ $\quad y=-\frac{dg}{ds}$

$y=$

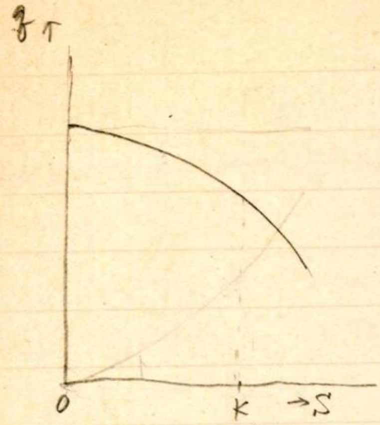




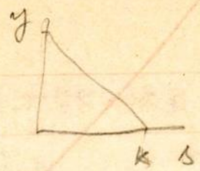
$M_2-\boxed{\mathit{4}}S$

○ 金不足のために 修学率の低下が甚だしい!

不足額



$$y = \frac{y_0}{K}(K-s)$$



$y =$

$$y = -\frac{dq}{dS} = \frac{y_0}{K}(K-s)$$

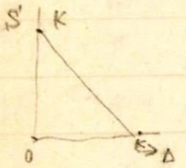
$$-\frac{dq}{ds} = \frac{y_0}{K} S$$

$$q = -\frac{1}{2}\frac{y_0}{K} S^2 + q_0$$

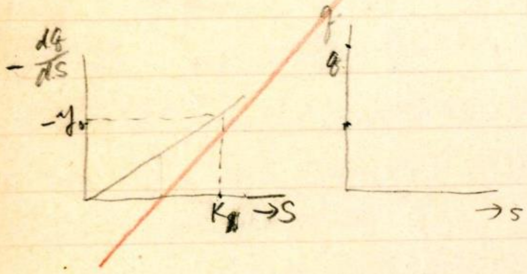
故に

$s = K$. $\quad \Delta = 0$

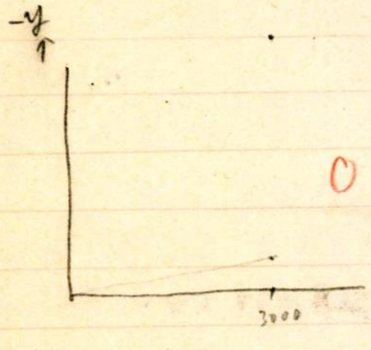
$S = 0$ $\quad \Delta = K$



$$S = -\Delta + K$$
$$= K - \Delta.$$



$-y =$



○ 同じ不足額 3000 円でも ある者にとっては 経営困難の場合は
Ⅱ' 以下で 支障も感じない という者もあろう.
例へば d が非常に大きく 1^h の深夜で 300 円稼せげる.
逆に y は不可能に近い 即ち 脆弱 状態のものもいる.

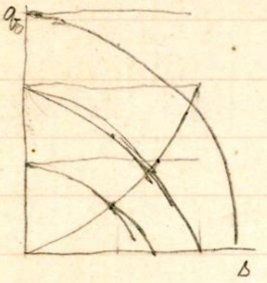
$$-y = \frac{1}{d}\cdot\frac{1}{x}$$

$$q = \frac{x \cdot w}{y_0 + y}$$

$$yq + y_0 q = xw$$

$$y = \frac{xw - y_0 q}{q}$$

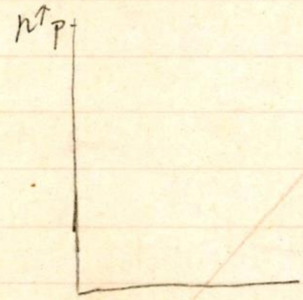
γとは 不足額の増加分に対する総需要低下の割合 $-\frac{dq}{ds}$



qの測定は，貨幣評価の増減より出し方がわからん
増減

故に例へば 100円につき何点 下がるかということで
表わせる

$$-\frac{dq}{ds}=\frac{dp}{ds}$$



pとsとは直接の関係はない pはtと関係あり

sとtとは $ds=\alpha\cdot dt$

故に $-\frac{dq}{ds}=-\frac{dp}{ds}=-\frac{1}{\alpha}\frac{dp}{dt}=-\frac{1}{\alpha}\cdot\frac{t}{p}$

$s=\frac{s}{\alpha}t$

$k=\alpha t$

$$\varepsilon=k_1k_2x\left(-\frac{1}{\alpha}\right)\left(\frac{t}{p}\right)\frac{1}{k}(k-s)$$

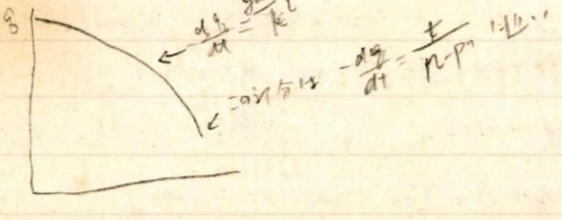
$t=$

$$=\frac{k_1k_2x}{p-p''}\frac{(k-s)}{\alpha^2}$$

$$q=q_0-\frac{1}{2}\frac{\gamma_0\alpha}{k}t^2$$

$$q_0=\frac{xw}{y_m}\qquad\frac{dq}{dt}=-\frac{\gamma_0\alpha}{k}t$$

①



②

(γのため)
pがp''に近づいているかどうかということは pでみるより 生活状況でみた方が早いかもしれない，即ちこの生活状態では pはp''に近づかざるを得ないというわけである

低下したれ、低下した補修量(t)、不足額

$\frac{t}{T}$, $\frac{K}{M_2}$, $\frac{r}{P}$, $\frac{dq}{ds}=\frac{dt}{ds}$.

経済的理由による

修繕困難 を どのように定義し 且つ その度合を どのように測定するか ということは

最も重要なことである 次に記すことも 私にとって 自信のもてるものではない

併しその評価的決定は むづかしい

t, 不足額, 修繕量の減の高では 修繕容易とか 困難とか 不可能とかは 説

明出来ない, $\frac{t}{T}$, $\frac{K}{M}$, $\frac{q}{Q}$ or $\frac{dq}{ds}$ となる

(~~たとえ~~ では即ち 比の形では 容易とか

前後のものは 人の 入るところに 弱点がある

「経済的理由による修繕困難」を 次の ように いいかえることにする, ~~修繕の意思あれにもかかわらず~~ 修繕のための費用が

不足しているので, ~~充分な~~ 修繕量 ~~が得られない~~

をうることが困難である

「 」を評価するものが出来たとすれば それには 次のような事項が察知出来ることが

望ましい

1)

修繕のための費用の不足, 修繕量の減少, 修繕が困難である, 従って「y」の

これには次のような面が含まれる

度合の評価には これ 少くとも上記のことが 含まれることが望ましい, 例えば t, 不足額 K, 修繕量の減少 q 目

$\frac{t}{T}$, $\frac{K}{M}$, $\frac{q}{Q}$ 等では そのうち一方しか あらわさない

y は 従ってまた 変化~~するので~~し且つ 従って一定の 値でなく ある巾を もつので y の 現況

のみが 明らかであっても 不充分である 即ち (y-s) との関係をも 知れる~~必要がある~~形の

ものであることが 望ましい. $\frac{t}{T}$, $\frac{K}{M}$, $\frac{q}{Q}$ 等は その意味で 充分とはいえない, ここでは

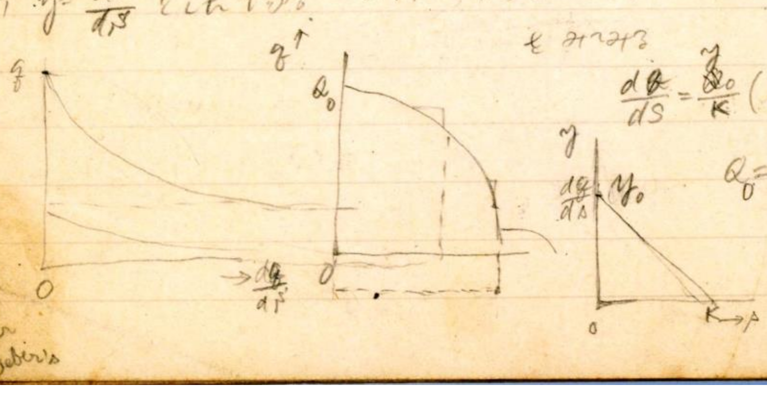
$y=\frac{dq}{dS}$ におきたいと考える これならば もし $y=f(s)$ の 内容が わかれば

(正確な必要がある)

~~$y=\frac{\partial q}{\partial s}$~~ 低下した修繕量 等も 算出可能となる.

今 $y=\frac{dQ}{dS}$ とした場合 いろいろ 修繕に支障があるとか 修繕困難, 修繕不可能 とかいった関係

をみてみる



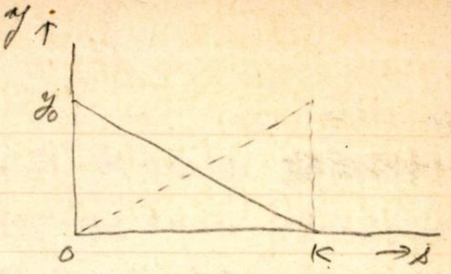
$\frac{dQ}{dS}=\frac{y_0}{K}(K-S)$ $\quad q=y_0 s-\frac{1}{2}\frac{y_0}{K}s^2+AQ_0$

$Q_0=\frac{x\cdot w}{y_{00}}-($ $\quad)$

$=\frac{xw}{y_{00}+y}$

weber

Weber's



(1図)

$$y = -\frac{y_0}{K}s + y_0$$

$$\varepsilon = k_1 x \quad \text{-------- (1)}$$

$$\varepsilon = k_2 y \quad \text{-------- (2)}$$

$$\therefore \varepsilon^2 = k_1 k_2 x y \quad \text{-------- (3)}$$

$$\varepsilon = \frac{dm}{ds} = \frac{dy}{ds} \cdot \frac{dq}{dy} \cdot \frac{dm}{dq} \quad \text{---- (4)}$$

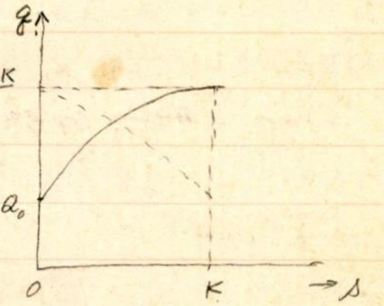
$$y = f_1(s) \quad \text{-------- (5)}$$

$$\begin{cases} y = \dfrac{dq}{ds} & \text{但し} \quad \text{---- (6)}, \\ y = \left(-\dfrac{y_0}{K}s + y_0\right)\rho & \text{---- (7)} \end{cases} \qquad \begin{cases} s = 0 & y = y_0 \\ y = 0 & s = K \end{cases}$$

とすれば　但しρは（y−s）関係が1図の如き（直線的関係から はずれた場合には その補正をするものとする）

ρ=1とみなしうる範囲では

$$\frac{dq}{ds} = \frac{y_0}{K}(K - s) \quad \text{-------- (8)}$$



(2図)

故に　$q = y_0 s - \frac{1}{2}\frac{y_0}{K}s^2 + Q_0$ ---- (9)

$$= Q_0 + \frac{y_0}{K}s\left(K - \frac{1}{2}s\right) \quad \text{---- (10)}$$

ρ≠1の場合には　$q = Q_0 + \frac{y_0 \rho}{K}s\left(K - \frac{1}{2}s\right)$

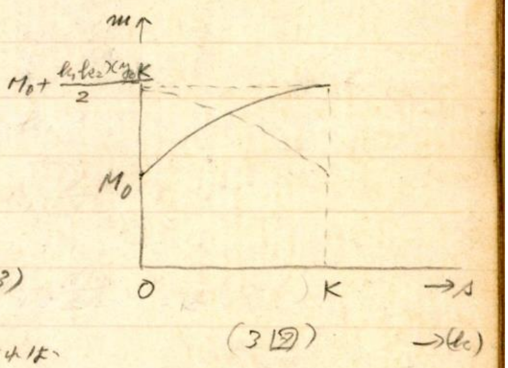
(2) (4) (6) から

$$k_2 = \frac{dm}{dq} \quad \text{-------- (11)}$$

故に　ρ=1 では

$$\varepsilon^2 = k_1 k_2 x \frac{y_0}{K}(K - s) \quad \text{-------- (12)}$$

$$\frac{dm}{ds} = k_1 k_2 x \frac{y_0}{K}(K - s)$$



(3図)

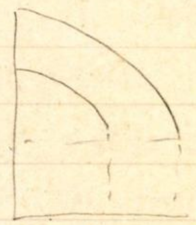
故に　$m = M_0 + k_1 k_2 x \frac{y_0}{K}s\left(K - \frac{1}{2}s\right)$ -------- (13)

ρ≠1では　$m = M_0 + k_1 k_2 x \frac{y_0 \rho}{K}s\left(K - \frac{1}{2}s\right)$

k…不足額（貸与した後での）　K…貸与前の不足額，s…貸与額とすれば

$$K = k + s$$

$$s = K - k$$

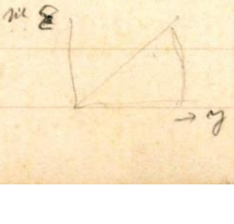


$$\begin{cases} y = \dfrac{y_0}{K}k \\ q = Q_0 + \dfrac{y_0}{2K}(K^2 - k^2) \\ m = M_0 + \dfrac{k_1 k_2 x y_0}{2K}(K^2 - k^2) \end{cases}$$

~~Q_0, xに関係あり~~

上図は使えない
あくまでも　$\varepsilon = \frac{d\varepsilon}{\partial x}$

∂y



育英会法の実施についての考察

一 考察の目的

~~以下の~~本考察は 日本育英会法（以下単に育英会法と記す）第一條の ~~具体的な~~ 実施方法 ~~について~~ のうち に関し 次に記す範囲のものについて 行う

~~日本~~ 育英会法 第一條 ~~を次に記す~~

「日本育英会は 優秀なる学徒にして，経済的理由により 修学困難なる者に対し 学資の貸与 その他 これが育英上 必要なる 業務を行い 以て国家有用の人材を 育成することを 目的とす」

上記のうち「その他これが育英上必要なる業務」の部分に ~~関する~~ ついて ~~考察は~~ ~~行なわない~~ 行う ことにする。

本考察は

一 同法の 実施に 関する考察のうち 次の ~~二つ~~ 課題 ~~に集約される~~ についてのみ行う

I) 任意の人間(者)に 貸与される 最も適当な 学資の算出法

II) その貸与によって，育英会法の 目的を どれだけ ~~達成するとみなされるか~~

目的を上記に選んだ理由 ~~は~~

~~二 けだし~~ 1) 貸与額の算出法は 貸与を行う 場合には 是非共 必要なことであり

2) 是非共 知らねばならぬ ことである ~~（例えば いかなる方法の貸与を行っても 育英会法の目的は 全く 達せられない という ことが 明らかに なったとすれば 育英会法実施のための 国家予算は 皆無と ならざるを得ない であろう）~~ と考えたからである。

II) 貸与を受ける人物は 並に同法実施のために 支出される国家予算の 算出基礎について 国家予算の 算出基礎は 貸与の 源泉になる 国家予算を 定めるうえに 育英会法実施のための

しかして この 目的の ための 根本の 仮定は 次のものである 即ち 貸与は 育英会法の目的を 最大ならしめるように 行われるものとする

① X もしも 育英会法に 第四項がないもの ~~とすれば~~ 或は 第四項を 無視したもの ~~とすれば~~ と 考えた 場合 本考察の 目標（例えば 貸与額の算出）をば ~~達成されるであろうか~~ どうなるであろうか ~~ここでは~~ ごく 大づかみに かということを 考えてみる

今 第一項 第二項 の 條件を 共に 備える者が あったとする。 この者に 学資の 貸与が 行われた 場合 我々の経験から ~~貸与~~ は 第一項の 條件に 変化を 与えることは ないが 第二項の 條件には 変化を 与えるであろうと 考えることが 出来る。 即ち 第二項の 経済的 理由による 修学困難の 度合 は 学資の 貸与によって 減少すると 考えられるからである。 もしも そうで あったと すれば 貸与によって 修学困難の 度合は 減少し やがて 修学困難が なくなる。 即ち 第二項の 條件を 失う。 その者は

故に 貸与額は，（国家予算の 制限を 受けないと 考えた 場合においても） 算出可能となる。 但し 上記の 大ざっぱな 考察の 結果 次の 根本的な 傾向に ぶつかる。

1) 第一項の 條件は 第一次 選考の 役割を するだけで，了実上 役立っていない。 即ち，貸与が ~~第一項の 條件に よって~~ 予想 ~~貸与額の算出という目的に対して~~

2) ~~貸与された~~ となる 上記の 仮定による 了実は 学資 貸与によって 経済的理由による 修学困難を 減少しない 例が

この問題の解答にあたつてのよるべき資料は上記育英会法に記載されていること、のみであることが理想であるが、それが困難なときは我々の経験にもとづく資料をもよらねばならないで

二、~~数~~ ~~貸与並びに目的達成の算出~~ あろう、まづ

~~もしも この問題を解決することが可能であるとすれば その鍵は 育英会法~~ ~~に記載されていること~~ 以外

~~にはないと思われる~~、次に同法の記載文字の中から具体的な事項 ~~及びそれから導き出される~~

~~とみなしうる事項を~~ 抽出し 且つそれらについて考察する

第一項 優秀なる学徒、にして

第二項 経済的理由により修学困難なる者、に対し

第三項 (日本育英会は) 学資の貸与を行い

第四項 (以つて) 国家有用の人材を育成することを目的とする

~~4項に反する場合は資格者といえども貸与しないか~~

~~四項の如何にかかわらず資格者には貸与すべきか~~

~~四項を資格の条件として1又は2に加えるか~~

四項4項満足されても 1) 2) が満足されなければ駄目

1) 2) を満足する者には まづ 3) を実施せよ、そうすればそれによつて 4) は満足されるであろう たとえ満足されない例があつたとしても それは大したことはないから、問題にしなくてよいだろう、逆に 4) を 1) 2) に加えることは むしろ育英会法の趣旨に反するであろう

第一項、第二項、第三項の内容 ※1

2※ 経験上、学問をするためには費用が必要であるが

この費用(おおざつぱに学資としておく、学資の~~考察は~~ について 修理 ~~事~~ で行う)が不足する者~~~~は、上記第三項の 学資の貸与をうけたいと希望するであろう 又、学資が不足していない者、学問をしようという意思のない者にとつても、学資と称して貸与をうけることを望む者もいるかもしれない (一方、貸与可能の国家予算には自ら限界がある) 故に 学資貸与の条件を規定することが必要となる、第一項、第二項が この資格を定めるものであるとみなすことが出来る ※①

目的達成のための手段として資格者に貸与するのか

以つて → それによりて

すべて目的が最も大切

その目的達成の手段として かきまる

×

> 第三項を行いうる者は次の条件を悉く具備しなくてはならない
>
> 条件 a. その者は学徒であること
>
> 条件 b. その者は優秀であること
>
> 条件 c. その者は経済的理由による修学困難であること.

それによつて、否れるなれ

彼は国家有用の人材となる意思はない

が同法の行為を示すものであり、第一項、第二項が 行為の ~~及び範囲~~ 発生条件 を示すものである

1※ 第三項の行為は 第一項、第二項の条件を共に備える者になされる.

説明 ※2

この点 また次にのべる

しばしば存在する、このような者に対する貸与額は無限に大きくなる.

育英会法の実施にあたつて 第一、第二、第三項 従つて ~~本国~~ のみでは (本国補われ) 決定的に困難である

第四項と（その）他の項との関係 ~~（上記について）~~

第一項，第二項の條件を満足する者
即ち ~~資格者~~ に学資を貸与することが国家有用の人材を育成することにならない場合について

第四項とその他の項とが矛盾する場合について考察する

これには二通りのあつかい方がある　1）第一．第二項の條件を満足する場合でも第四項を満足しない或は満足しないとみなされるときは第三項の行為はなされない．2）その場合でも第三項の行為はなされる．（即ち貸与條件は第四項を加えたものにする）

以下行う本考察は前者に従うものとする

説明．前者の解釈を至当とする考え方の例（たとえば 大漢和辞典による）

第四項の「以て」の字句は「それによりて」と解するのが至当のようである．（解釈による）この場合資格者に学資を貸与する ~~こと~~ という行為は第四項の目的を達成するための一つの手段とみなすことが出来る．従って第四項と其の他の項とが矛盾する場合には ~~第四項に従~~ ~~わねばならぬ~~，~~いと理解する~~ ものと 貸与は行われないと考える．

後者の解釈を至当とする考え方の例．

貸与は第一項，第二項のみでよい．即ち，それだけで第四項は充分満足される條件であり，たとえ第一項第二項を満足して第四項を満足しないような例があつたとしても，それは問題にならない．僅少であって．むしろ第四項を貸与の條件として加えることは ~~煩雑の~~ 弊害をともなう

本考察が前者に従う理由は，後者の考え方が合理的に乏しいと思われることのほかにもし後者を是認すれば第一項，第二項を満足して第四項を満足せしめない例を，人為的に限りなく増大 ~~させられる~~ 出来る 可能性が，あるので 收しうつかなくなることをおそれたの ~~から~~ である．（第一，第二，第三項の内容の説明した）

以上を ~~総括~~ 整理すれば次のようになる

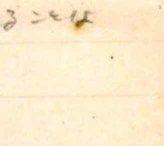
第三項（学資の貸与）に該当する者は次の條件を盡く具備することが必要である

條件 a．その者は優秀であること
條件 b．その者は貧困 〃
〃 c．〃 経済的理由により修学困難であること．
〃 d．学資の貸与によつて国家有用の人材が育成されること，或は育成されるとみなされること（「或は ~~注~~ 以下」を記した理由は国家有用の人材の育成は貸与前には事実上判明しないからである）

$e = \frac{\Delta m}{\Delta} \geq e_0$ 1.

$e = kx$

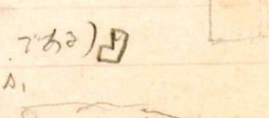
→ $\frac{\Delta m}{\Delta} > e_0$



徹底化して
分数

Δ_1　Δm_1　$\frac{\Delta m_1}{\Delta_1} > e_0$　$\Delta m_1 > e_0 \Delta_1$

Δ_2　Δm_2



$\frac{M}{S} > e_0$　$\overline{\Delta_1 + \Delta_2 + \cdots} = S$　$\overline{\Delta m_1 + \Delta m_2 + \cdots} = M$　$e_1 + e_2 + \cdots = \Sigma$

※ここに二つの假設をおく

假設 1…… 貸与は，貸与額に比して，育英会法の目的を達成する量が比較的大きい（従って確実である）とみなされる場合にのみ行われる

説明…… 育英会法は貸与という国家の犠牲の代償として国家有用の人材育成という目的をもっている。今貸与と目的達成量との関係を考察する ~~即ち Give and Take である~~ 1) ~~従って~~ 目的達成の量が皆無とみなされる貸与は行なわれない（条件a 4）~~また~~ 2) 貸与額に比してごく僅かな目的達成量を持つのみとみなされる場合は貸与されない ~~を考えてみるのに~~ ~~この場合にまで貸与可能な~~（或は不確実な）~~国家予算は国家の現状~~からして ~~この場合まで~~ ~~の貸与~~ ~~からして到底困難と思われる~~ 3) ~~従って~~ ~~実現可能な~~ 従って 貸与は假設1に記した範囲と ~~するということ~~なる。尚この假設は次の理由から妥当であるように思う

假設 2…… 国家有用の人材は練磨（修学）によって育成され，且つ同一練磨に対しては該人物の優秀性（素質）が大きいほど育成される量も大きい。

説明…… 奨学制度という見地に立った場合，一般にある人が将来国家有用の人材となるかもしれないという期待は，その人の素質と練磨の度合（練磨は現在のみならず過去の履歴も含む）とに関係があるとみなさざるを得ない。即ち育英会法はことわざの「玉（素質）磨かざれば（練磨）光（国家有用の人材）なし」の趣旨によってつくられたものと考えたい ※4

8※ Ⅲ 上述にもとづき条件a)を考察する

※8 ~~在学していない者でも条件b,cを持ち且つ条件aを高度に保持するとみなされる者の存在は充分に考えられる~~

僅かながらも

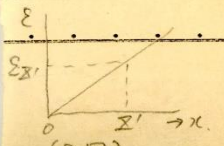
但しこれを条件aによって除いた理由は，假設1における効率の具体的算出が困難であるためと思う。即ち効率の算出には前項Ⅰの過程が明らかにされることが必要であるが，そのうちの例えば修学量の算出についても，学籍のない修学者の場合は，客観的な評価が困難である。即ち貸与の効果が不確実となり全体として効率の低下はまぬがれない ~~ことになってしまう~~ 従って条件a)によって除くことにしたものと ~~やむをえない~~ 考える

○ ~~同じく条件bについて~~

○ 優秀でない ~~素質の~~ 学徒でも，修学への強烈な意志が経済的理由ではばまれているような者に学資を貸与し修学を可能にするときは，必ずや育英会法の目的達成量は存在するものと考えられる，但し假設1，2を容認すれば，素質が ~~に~~ 低下するに従って限りなく低下する 効率も他の条件にかかわりなく限りなく低下することになる，即ち素質の点において，限界をおく必要が生じてくるのである。~~効率は素質と比例的関係にあると~~ ~~みなされるからである~~

今素質の優秀性の評価を x とし $X \geq x \geq 0$ とする　$x=0$ とは白痴であり $x=X$ とは天才を意味する。x はその間において例えば劣等生，やや劣る，普通，やや秀れている，優秀，非常に優秀というようになってゆく　育英会法のいう優秀とは上記のような位置に存在していると思われる（x のこの値を X' とする）次にのべる修学困難における制限と共に限界の効率はかなり厳しい所にあるように思われる。要するに効率は優秀なる学徒の度合 x の増加と共に大きくなる

今 ~~効率をE~~，ε と x との関係を簡単のためここでは直線的とすれば 2図から



（2図）

$$\varepsilon = \frac{\varepsilon_{X'}}{X'} x$$

となる。但し $\varepsilon_{X'}$ は $x = X'$ の ε の値である。

尚 $\frac{\varepsilon_{X'}}{X'} = k_x$ として $\varepsilon = k_x x$ としておく……………（4）

※9 → 次頁へ

Xの……

以上は育英会法が直……
の根本的な假設をおく……

条件aについて
今育英会法が貸与……
解釈には 1) 学問を……
を含めてよいと思う）；……
の二つの解釈があ……
何となれば 条件……
修学困難はあり……

※8に挿入

4.※ 然ら条件 a) b) c) d)；……

6※ Ⅰ) 貸与は次の三つの過程を経て
何でもよいというのではな……

6※ Ⅲ 条件aにより……

ケイケントニヨリ
カンネン的デナクテリョウテキ

以上は育英会法が直接示す條件であるが、次に我々日常の経験を加えて二つの根本的な假設をおく ※3

※6に挿入

條件aについて

今育英会法が貸与学生を学徒に制限した理由について考えてみる。(尚学徒の解釈には 1)学問を志す者 2)学校に在籍する者。(通常学は[学生の意味で]大学に(大学院を含めてよいと思う);徒は生徒の意味で高等学校以下の学校に在籍する者と解する)の二つの解釈があるが前者の解釈によるとすれば條件a[という貸与の制限]は必要でなくなる 何となれば條件cに「修学困難であること」とあるが学問を志さない者に修学困難はありえないからである。従って 2)の解釈によることとする)さて

4.※ 貸与條件a)b)c)d)、上記假設から[及び我々の経験から容易に是認出来ると思われる]次のものを導き出す ※5

I) 貸与は次の[三つの]過程を経て目的達成へと導かれねばならない(即ち目的さえ達せられれば手段は何でもよいというのではない 例えば[illegible]ではいけない)

6.※ 又 條件dにより　下記は同時に成立しなくてはならない

1) 貸与により経済的理由による修学困難[の度合]が減少すること

2) 経済的理由による修学困難[の度合]の減少により修学量が増加すること

3) 修学量の増加により国家有用の人材が育成されること(假設2による)

上記は微小額の貸与の場合でも勿論成立すべきであるから

貸与額を s、微小貸与額を ds、経済的理由による修学困難の度合を y、微小貸与による y の変[illegible]

修学量を q (ここでいう修学量とは[即ち練磨した量、勉学時間といったものであるとしておく]その者の優秀性を考慮に入れない場合のものである) y の変化にともなう q の変化を dq、

国家有用の人材育成量を m、q の変化にともなう m の変化を dm とし未知の文字は正のみ(>[illegible]をあらわす)

$$\frac{dy}{ds}<0 \quad \frac{dq}{dy}<0 \quad \frac{dm}{dq}>0$$ が必要である ------ (1)

$$\frac{dm}{ds}=\frac{dy}{ds}\cdot\frac{dq}{dy}\cdot\frac{dm}{dq}$$ しかるに $\frac{dm}{ds}>0$ なるに

~~$\frac{dm}{ds}=\varepsilon$ とおき ε を効率(Efficiency)、m, s がある大きさを持った場合を E とし E を平~~

率(Average Efficiency)と呼ぶことにする

假設1に合致するような ε の値を ε_0 (限界効率とよぶ)とすれば

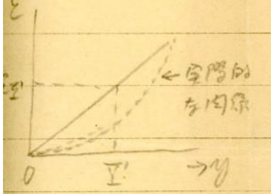
$$\frac{dm}{ds}=\frac{dy}{ds}\cdot\frac{dq}{dy}\cdot\frac{dm}{dq}>\varepsilon_0$$ となる ※7

同じく條件Cを考察する。

経済的理由による修学困難とは「我々の経験から 学資の不足が修学に支障をもたらす度合を、困難の域にまで及ぼしている」とみることが出来る。即ち修学支障の度合は、常識的に 修学容易 → 修学にやや支障がある → 修学やや困難 → 修学困難 → 修学不可能 といった順序になるであろう（修学支障の度合をyとし y=0は修学容易, y=∞は修学不可能としておく）。條件Cが修学支障の度合の制限を修学困難に……思いたのは何故だろうか、我々の経験から次のように説明したい。

即ち 修学支障の度合が小さいときは、（例えば その学徒自身が ~~容易だ~~ 修学と両立すると思う程度のアルバイトを ~~せざるを得ぬ~~ しているような場合）彼らの効果は不確実で むしろ 貸与しない方が 国家有用の人材への期待は大きいと考えられる場合がある。例えば適度のアルバイト等の苦、勤勉 自立の精神を養い それによって一層奮起させる可能性がある。このような学徒への経済援助はかえって社会に甘えさせ ユウジュウに落ちいらせてしまう虞れがある。但し これに反し 修学支障の度合が進んで困難の状態となれば、経済援助の必要性は緊急となり、従って効果も確実且つ大きいものと考えられるようになる。この度合は学徒の在学不可能となる直前において最高となるであろうということは想像される。さらに以上のことから次の関係が導き出される。

即ち 効率εと修学支障の度合y（以後 修学困難の度合という）との関係は條件Bの場合と同様 で比例的な関係にある 直線的関係とする。



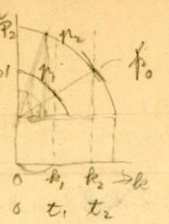
yの修学困難の評価をI'、その時の効率を$\varepsilon_{I'}$とすれば

$$\varepsilon = \frac{\varepsilon_{I'}}{I'} y$$

となる。$\frac{\varepsilon_{I'}}{I'} = k_{cy}$ として $\varepsilon = k_{cy} y$ としておく ……(5) ※10

出すなら前者にしたい、後者は下手すると傷つける恐れもある。但し外観では質の悪い者ほどよごれがひどい。これをどうするか。

同じ1万の奨学金を与えるにしても、あまり困っていないものと、脱落寸前のものとでは 効率が異る。

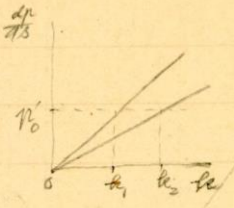


$$\begin{cases} \dfrac{dp_1}{ds} = \dfrac{p_0'}{k_1}k & p_1 = P_1 - \dfrac{1}{2}\dfrac{p_0'}{k_1}k^2 \\[2ex] \dfrac{dp_2}{ds} = \dfrac{p_0'}{k_2}k & p_2 = P_2 - \dfrac{1}{2}\dfrac{p_0'}{k_2}k^2 \end{cases}$$

$$\varepsilon = \frac{dm}{ds} = \frac{dy}{ds} \cdot \frac{dz}{dy} \cdot \frac{dm}{dz}$$

貸与によって どれだけ どろが 落ちるか， 初めの白さと現在の黒さとの差

貸与によって どれだけ 成績があがるか， 初めの x と 終



m
80
40
0

修困生

① x の影響は効率としては出てこないが， 貸与額に出てくる

② 推薦順位というものは全く意味のないものになる

③ 効率という考え方は 貸与額を定める一つの手段にすぎない

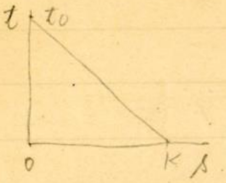
$\frac{dp}{ds}$

勉学がしにくい / 時間が不足する

経済的理由による修学困難とは， 学資に不足するので 勉強が出来ない という考え方を

成績低下し在学困難となる

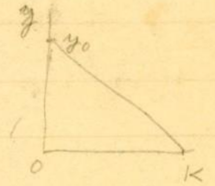
$\frac{dt}{ds}$ …… const となって 〃 修困以下を除外することが出来ない



$t = -\frac{t_0}{K}s + K$

従って $\frac{dp}{ds}$ …… 限界効用係数

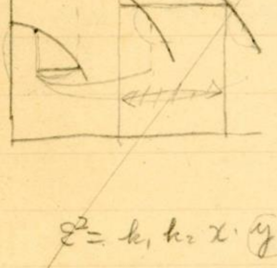
$\frac{dt}{ds} = -\frac{t_0}{K}$



$$\begin{cases} \varepsilon = k_1 y = k_1 \dfrac{dp}{ds} & \text{縦の隔差} \\ \varepsilon = k_2 x & \text{横の 〃 〃} \rightarrow \text{貸与額} \end{cases}$$

$y = \frac{y_0}{K}(K-s)$

$$\begin{cases} \dfrac{dp}{ds} = \dfrac{y_0}{K}(K-s) \\ p = \dfrac{y_0}{K}s\left(K - \dfrac{1}{2}s\right) + P_0 \end{cases}$$



$\frac{dm}{ds} =$

$$\varepsilon^2 = k_1 k_2 x \cdot \frac{dm}{ds} = k_1 k_2 x \cdot \frac{y_0}{K}(K-s)$$

$$\frac{dm}{ds}^2 = k_1 k_2 x \cdot \frac{dp}{ds} = k_1 k_2 x$$

$$\varepsilon^2 = k_1 k_2 x \cdot y = k_1 k_2 \cdot x \cdot \frac{dp}{ds}$$

10 ※ 適正貸与額及び目的達成量の算出について

適正貸与額とは次に示す原則によって定められた額であるとする。今算出の原則を「育英会法の目的を最高度に達成するためには与えられた国家予算を学徒にどのように分配貸与すればよいか」ということに仮定する。

上記は具体的に次のようになる

学徒に貸与する額を夫々 s_1円 s_2円 …

・貸与可能の国家予算を A円

貸与をうけた学徒がその貸与が原因となって育英会法の目的を達成するとみなされる目的達成量を夫々 m_1, m_2 … 且つこの合計を Mとすれば

$s_1+s_2+\cdots = A$（一定）の条件のもとで Mを最大にするような $s_1, s_2, \cdots$ が適正貸与額であるということになる。

さて (3)(4)(5) 式から

$$\varepsilon = k_y \frac{y_0}{K}(K-s)$$

$$\varepsilon^2 = k_x k_y x \cdot \frac{y_0}{K}(K-s)$$

$$\left(\frac{dm}{ds}\right)^2 = k_x k_y x \frac{y_0}{K}(K-s) \text{ - - - - - - - - - - - -}$$

$$\frac{dm}{ds} = \sqrt{k_x k_y x \frac{y_0}{K}}\,(K-s)^{\frac{1}{2}} \text{ - - - - - - - - - - - - - - - - - - (6)}$$

$$m = M_0 + \frac{2}{3}\sqrt{k_x k_y \frac{x y_0}{K}}\,(K-s)^{\frac{3}{2}} \quad \text{（}M_0\text{は積分常数）- - - - - - - (7)}$$

即ち mは貸与額 sの増加と共に増加する（勿論 $s<K$）

今 s_1, s_2 … が適正貸与額であったとする

任意の学徒 A, B の適正貸与額を s_a, s_b　目的達成量を m_a, m_b とする

A から微少額 ds を減じて B に増加したとする。目的達成量は A で減少し B で増加するから その分を dm_a, dm_b とする。貸与額の計は変化しないが目的達成量の計は上記仮設から

$$m_a + m_b \geqq (m_a - dm_a) + (m_b + dm_b)$$

$$dm_a \geqq dm_b.$$

次は逆に ds を B から減じて A に増加したとしても、

同様に　$dm_a \leqq dm_b$

即ち　$dm_a = dm_b$

故に　$\dfrac{dm_a}{ds} = \dfrac{dm_b}{ds}$

となる

即ち すべての学徒に適正賃与額が賃与されているとすれば その給与額は（その賃与額で）悉く等しいことになる。この値を限界効率 ε_0 とすれば（$\varepsilon_0 \fallingdotseq \sqrt{\varepsilon_{\text{Ⅰ}} \cdot \varepsilon_{\text{Ⅱ}}}$ の場合

$$k_x k_y x_1 \frac{y_{01}}{K_1}(K_1 - s_1) = k_x k_y x_2 \frac{y_{02}}{K_2}(K_2 - s_2) = \cdots\cdots = \varepsilon_0 \quad (\varepsilon_0^2 \ldots$$

故に $k_x k_y x_1 \frac{y_{01}}{K_1}(K_1 - s_1) = \varepsilon_0$ 故に $s_1 = K_1 - \dfrac{K_1 \varepsilon_0}{k_x \cdot k_y \cdot x_1 y_{01}}$

同様に $k_x k_y x_2 \frac{y_{02}}{K_2}(K_2 - s_2) = \varepsilon_0$ 故に $s_2 = K_2 - \dfrac{K_2 \varepsilon_0}{k_x k_y \cdot x_2 y_{02}}$

故に $\overbrace{s_1 + s_2 + \cdots\cdots}^{\text{上式を合計して}} = K_1 + K_2 + \cdots\cdots - \dfrac{\varepsilon_0}{k_x k_y}\left(\dfrac{K_1}{x_1 y_{01}} + \dfrac{K_2}{x_2 y_{02}} + \cdots\cdots\right)$

$$\varepsilon_0 = \frac{K_1 + K_2 + \cdots - (s_1 + s_2 + \cdots)}{\dfrac{1}{k_x k_y}\left(\dfrac{K_1}{x_1 y_{01}} + \dfrac{K_2}{x_2 y_{02}} + \cdots\right)} = \frac{(K_1 + K_2 + \cdots) - A}{\dfrac{1}{k_x k_y}\left(\dfrac{K_1}{x_1 y_{01}} + \dfrac{K_2}{x_2 y_{02}} + \cdots\right)}$$

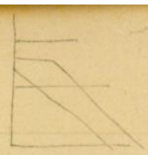
故に A及び夫々の学徒の $k_x \cdot k_y \cdot x \cdot y_0 \cdot K$ が判明すれば（ε_0）適正賃与額を算出することが出来る 又は ε_0 を与えることにより A の算出が可能となる

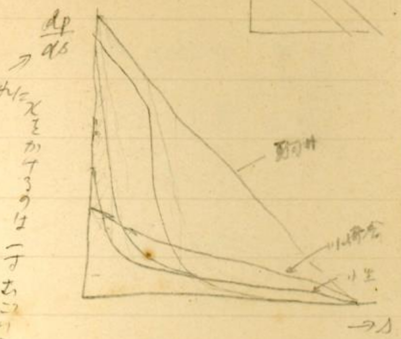
同様にして（7式から）賃与による目的達成量も算出可能となる

dimension の問題はどうなるか

x 17

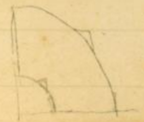
経済的事情による)
(修学困難の方についての考察

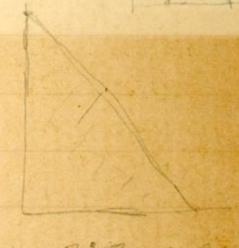




$n = \int f(s)$

面積が 総額 即ち
(生活による)





学費大、子弟数小 or Concave
子弟数大を誤って当らして それであがる
なければ sをゆくすればよい

修学困難
宗教は、
言葉合わせ
意思と感ずる (それはやめて父の言葉をつぎます
学校 ← 落第のない大学 修学困難として?
学問の種類
現実にあたっては 固有の学位はない
もとにおきかえる必要がある

x が同じで y は 5万円位 或る
額で評価されたとすれば 又 y
~~甲方~~の限界を 1,800円とすれば
甲は 2000円 では 1,700円と すれば
甲には 200円 では 50 か 額で
あるのに 甲に

育英会法実施に関する基本的な考え方／現在採用されている方法

a) 奨学金貸与資格に関する二つの条件　優秀なる学徒(x)と経済的理由による修学困難(y)に関し、x,yの資格が（育英会法に規定する）夫々の限界（X', Y'とする）よりも大きいと思われる者を選び、2)これらをx,yの総合された貸与資格（zとする）の順に並べる、3)一方学徒の支出を要する修学を調査し、修学の必要とする学資の平均値を算出し 4)然して国家予算の許す範囲内において上述の（資格を）資格者順位に従って貸与するという方法がとられている（尚この平均額を二種類程採用している）

次に現行の貸与に関する疑問点を考察する

a) 上述の方法そのものへの疑問

b) 上述の方法を実施にうつす場合に関する（具体的）疑問

b)の疑問（例えばx,yの測定方法の疑問、x,yを総合する方法の疑問等）は後で述べることとしここではa)について考察する。

a) 育英会法は「国家有用の人材を育成する」という目的を ~~はっきり~~ も規定しているにかかわらず上述の方法ではこの点が明瞭でない、強いていえば（学生が）資格者に貸与される場合には、育英会法の目的も自動的に達成せられるであろうという論旨であるようにみられる

（例えば、甲の学生はxの評価をA、yの評価をC ~~の者と~~ であり乙の学生は x=C, y=A ~~とせ~~ であったとすれば 両者は資格としては等しいことになる、従って現行方法によれば何の疑いもなく両者に学資が貸与されることになる。~~今一例をあげ~~

一方今日本の現十号に実験を入れて考えてみる。

甲は x=85点（学業成績で評価したとする） y=1500円（yを学資の不足額で評価したとする）（不足限度を1,000円とする）乙 x=55, y=3000円 而して奨学金を2,000円であったとすれば

甲は貸与されるが乙は

zを考えなかった

学業成績はxとzの両方の関係にある

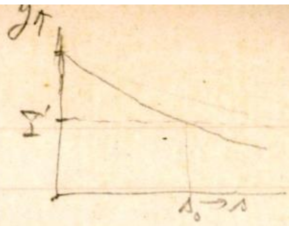
修学困難が貸与額のみに関係があるのではない

貸与の差等の詳細の問題を研究しておかねばならぬ

欠点
○目的に対して無関心
○従って貸与額は無目的の場合でも合理的に可能となる
○自然にzを考えている
A,A　AB　BA
BB　AC　CA
BC　CB　CC
○資格と貸与額との関係がうたわれていない

原則と技術

6,000
6,000



A. 目的達成量を考慮しない場合

1) $x > \Xi'$, $y > \Psi'$ の案を選ぶ

2) $y = f(A)$ を定め $y = \Psi'$ の A の値を A_0 とする.

3) A_0 の全部的な計が国家予算に等しいときはよいが 国家予算より小のときは Ψ' を大きくして等しくなる点を求め, 夫々の使う額を決定する (両者が)

B. 目的達成量をも考慮する場合（実施にあたっては この必要がしばしばおこる）

1) $x > \Xi'$, $\varepsilon = k_1 x$ とみて 国家予算を考えない場合 即ち 審議会法の
限界効率を ε_0 とすれば ($\varepsilon_0 = k_1\Xi'$) $\varepsilon > \varepsilon_0$ $\varepsilon > k_1\Xi'$ → $k_1\Xi' = k_2\Psi'$
同様に $y > \Psi'$, ε $\varepsilon > k_2\Psi'$

(審議会法はいかなる場合にも $\varepsilon > \varepsilon_0$ しか許さない, 即ち ε_0 に相当する $\varepsilon = k_1 x$ とみて x が Ξ' という訳け)

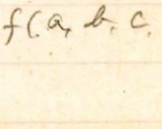
2) ε は当然 $\varepsilon = f(x, y, A, w, \cdots\cdots)$ であらわされる.
審議会法では x, y, A のみを考えればよさそうであるが
例へば外国人には供与しない理由が ε にあるとすれば やはり (理由はどうあろうと) $\varepsilon > \varepsilon_0$ ~~…~~ と
ならなければならない. 従って この式の内容を明らかにせねばならぬ. そして
$\varepsilon = f(A)$ の 関係になったとすれば, A 同様 $\varepsilon = \varepsilon_0$ に対応する A_0 を
求め, これらの合計と国家予算とを比較して, 使う額は算出されることになる
~~ε が大きいということは A を増しても ε の~~
((~~…~~ $y = f(A)$ の中に x を含ませることは出来ない

AとBとの重大な点は Aでは x は単に足切りのみの役割しかなさない; これに反し
Bでは使う額にも影響する

要約においては 効率のみ, $x > \Xi'$, $y > \Psi'$, $\frac{dy}{dA} > 0$

限界効率を規定するもの. 審議会法及び予算

審議会法は, はっきりした数字を示さないが大まかなところはわかる. その範囲内で
~~それぞれ~~ ~~…~~ 適当な数値をきめる, 結局その値が限界効率となる
国家の財政, 他の予算との関係バランスを考えて (最終的)
(国家の将来の計画)



A
◎ $x > \Xi'$ $y > \Psi'$ $\varepsilon \gg \varepsilon_{00}$,
使う額は $y = \Psi'$ 又は $\varepsilon > \varepsilon_{00}$ になるまで

$$\begin{cases} \frac{dy}{dx} = a \\ \frac{dy}{dx} = b = c(d - x) \end{cases}$$

$dy = a \cdot dx$
$y = y_0 + ax$

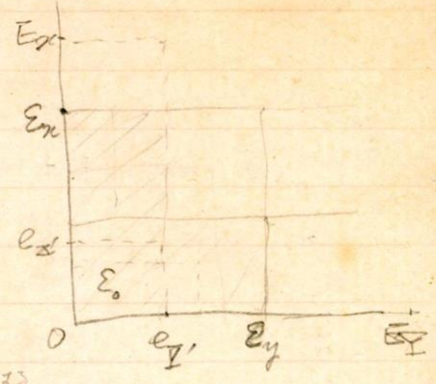
$\varepsilon =$
$\frac{dy}{dx} = f(a, b, c, x)$

$s \to$ 増加による y の減少が $\bar{Y}$ になった時

これも ε に換算される

y の減少のための ε の減少が ε_0 になったとき

y 以外の理由で $\varepsilon \to \varepsilon_0$ になったとき

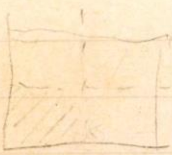


故に $\varepsilon = f(x, y, s, w \ldots)$

最高の効率を E とする y, s 以外の効率の~~割合を~~とする

y が s のとき $\bar{Y}'$ つまり ε_0 になったとする

だからどうしても $\varepsilon > 0$ が必要



イ) 予算が充分にあるときは ~~結構(?)~~ は

$x > \bar{X}'$ の者について $y = \bar{Y}'$ まで s をつづける。もし $s < s$ でも $\varepsilon = \varepsilon_x \varepsilon_{\bar{Y}'}$ までとなる

ロ) $y > \bar{Y}'$ 〃 充分にないときは $\varepsilon = \varepsilon_x \varepsilon_{\bar{Y}}$ まで 即ち

ε_{00} がきまる

$\left.\begin{array}{l} x > \bar{X}' \\ y > \bar{Y}' \end{array}\right\}$ の者について $\varepsilon \geqq \varepsilon_0$ まで s をつづける

$\varepsilon_{00} < E_{x'} e_{\bar{Y}'}$ の時は 非常に面倒となる

に意味がない もし入るとしても x の大きいほど y は小さくなるという逆現象にぶつかるかも知れない)

◎ 効率を $\frac{dm}{ds}$ にすることの説明

ε … 効率　　ε_0 … 予算に制限されない限界効率　　ε_{00} … 予算に制限された限界効率　　$\varepsilon_0 < \varepsilon_{00}$

1 $\varepsilon = k_1 x$

優秀なる学徒の限界を $\bar{X}'$、この時の ε の値を $\varepsilon_{\bar{X}'}$

$\varepsilon_{\bar{X}'} = k_1 \bar{X}'$

$\varepsilon = k_2 y$

同様に

$\varepsilon_{\bar{Y}'} = k_2 \bar{Y}'$

$\varepsilon^2 = k_1 k_2 x y$

$\varepsilon_0^2 = \varepsilon_{\bar{X}'} \varepsilon_{\bar{Y}'} = k_1 \bar{X}' \cdot k_2 \bar{Y}'$

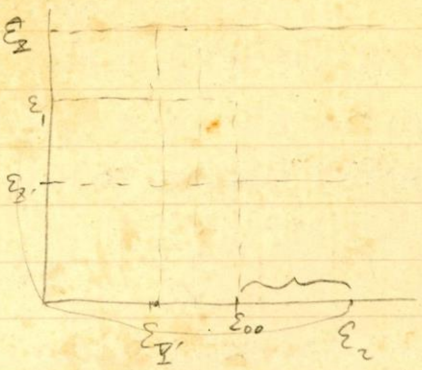
即ち $\varepsilon^2 < \varepsilon_0^2$ の場合は 徒ちは行われない と考えられる

即ち $\varepsilon \geq \varepsilon_{\bar{X}'}$ 又 $\varepsilon \geq \varepsilon_{\bar{Y}'}$

① $x \geq \bar{X}'$, $y > \bar{Y}'$ の者, $\varepsilon > \varepsilon_0$ の者に 徒ちを行い 徒ち額は $y = \bar{Y}'$ 又は $\varepsilon = \varepsilon_0$ のどちらかになった時の ~~徒ち額~~ 値をもって求る

②

$\varepsilon^2 = \varepsilon_1 \varepsilon_2$



限界効率 ε_0^2

$\frac{\varepsilon_0^2}{\varepsilon_1} = \varepsilon_{00}$

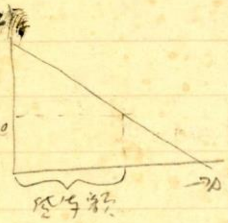
$\varepsilon_2 \to s$ を増して ε_{00} まで

$$\varepsilon_2 = \frac{dm}{ds} = \frac{dt}{ds} \cdot \frac{dp}{dt} = \frac{1}{d} \cdot \frac{t_0}{t_m} \cdot \bar{I}_m (K-s)$$

$\varepsilon^2 \leftarrow \varepsilon_1 \times \varepsilon_2$

故に

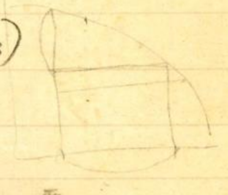
$\varepsilon_0^2 \leftarrow \varepsilon_1 \times \varepsilon_{00}$



$$\varepsilon_{00} = \frac{\varepsilon_0^2}{\varepsilon_1}$$

次に $\Sigma = \frac{dm}{ds}$ について

◎ 学資の貸与によって国家有用の人材 {が育成されること / を育成する} $\left(\frac{m}{s}\right.$ が成立する$\left.\right)$ → $\frac{m}{s} > 0$

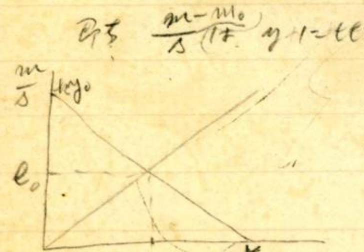


○ 貸与は修学困難な者になされる →
(経済的理由による)

このことは もし貸与額に比して m が小さのみは (即ち $\frac{m}{s} > l_0$ が必要) 不確実である
(修学困難でない者に貸与された場合は)

即ち $\frac{m-m_0}{s}$ は y に比例する, $\frac{m-m_0}{s} > l_0$.

$kKs - kkKs^2$



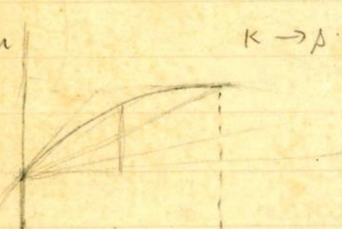
$$\frac{m-m_0}{s} = ky$$
$$= k\frac{y_0}{K}(K-s)$$

?

$$m = \frac{ky_0 s}{K}(K-s)$$

$$\frac{dm}{ds} = -\frac{ky_0}{K}$$

$$\frac{dm}{ds} = \frac{ky_0}{K}(K-2s)$$



$\frac{dm}{ds} = 0$ $K = 2s$

$s = K/2$

$$\frac{m}{s} = ky.$$

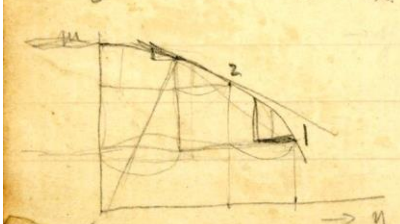
$$\frac{m_s - m_0}{s} = ky$$

貸与額にかかわらず成立するから
$\left(\frac{dm}{ds} = ky\right.$ となる

$y = 2x$

$m_s - m_0 = k\frac{y_0}{K}(K-s)$

今, $\frac{m_s - m_0}{s} > l_0$ とする $\frac{dm}{ds} > l_0$ とはならないか



$$\frac{m_{s1} - m_{01}}{m_{s2} - m_{02}} = 2$$

$\int_a^b f(x)dx$

~~修学困難な者には，~~ $y>\bar{Y}'$ の者には s の増加によって $y<\bar{Y}'$ までも行えるか

学費の貸与は経済的理由による修学困難な者に与える → この根本精神は ~~貸与~~

y が大きい場合になる 貸与の効果は確実である　に考えられるからである

もし貸与が y の小の者に行われる場合は 貸与額に比して m が小さいのは 不確実であり

~~従って~~ 貸与額によって 国家有用の人材の養成分は y が大きいほど大きい ~~から~~（何となれば）

しかして 前記のような ~~このような~~ 貸与は 国家の見地から出来ないから 貸与は y のある値以上の者 即ち修学困難

（これを $\bar{Y}'$ とする）以上の者になされる， 貸与額を s， 貸与による国家有用の人材の養成分を Δm

とすれば $\dfrac{\Delta m}{s}=k\,y$ （k は比例常数）

$\left(\dfrac{\Delta m}{s}>k y_e=e_0\right)$

上の関係は 貸与 ~~額~~ 額の（微分）場合にでも成立つから $\dfrac{dm}{ds}=k y$ 　$\dfrac{dm}{ds}=\varepsilon$（貸与の効率と呼ぶ）

とすれば 貸与の効率は（経済的理由による）修学困難が大きいほど大きいということになる

次に貸与は $y>\bar{Y}'$ の場合になされるから，（微分）貸与のための最低の効率を ε_0 とすれば

$\varepsilon_0=k\bar{Y}'$， 即ち $\varepsilon>\varepsilon_0$ の場合に貸与はなされる　（ε_0 を限界効率とする）

次に貸与額がある大きさをもった場合 ~~の効率 即ち~~ $\dfrac{\Delta m}{s}$ ~~について~~ について考察する

「学資の貸与によって経済的理由による修学困難は（一般に）減少する」と仮設すれば 貸与額の増加に

よって y は減少し，ε は減少し ~~も減少する 同様に~~ $\dfrac{\Delta m}{s}$ も減少する

（夫々の y の値における）

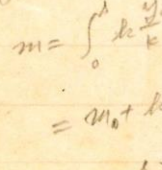
ε はやがて ε_0 に等しくなるが $\dfrac{\Delta m}{s}$ は ε_0 より大きい

（即ち $\varepsilon>\varepsilon_0$）（その ときの）

$y>\bar{Y}'$ の者に貸与 ~~額~~ は（微分を重ねれば）やがて $y=\bar{Y}'$，$\varepsilon=\varepsilon_0$ になる，併し このときの平均効率

限界効率の対策と

$\dfrac{\Delta m}{s}$ は限界効率 ε_0 より大きい なにもし ~~ε_0~~ 平均効率においては



$\dfrac{dm}{ds}=k\dfrac{y_0}{k}(k-s)$

$m=\int_0^s k\dfrac{y_0}{k}(k-s)\,ds$

$=m_0+k\dfrac{y_0}{k}s\left(k-\dfrac{s}{2}\right)$

$\dfrac{k\dfrac{y_0}{k}s\left(k-\dfrac{s}{2}\right)}{s}>e_0$

or $\dfrac{dm}{ds}>e_0$

$k\dfrac{y_0}{k}(k-s)>e_0$

$\begin{cases} k\dfrac{y_0}{k}\left(k-\dfrac{s}{2}\right)>e_0 \\ k\dfrac{y_0}{k}(k-s)>e_0 \end{cases}$

例えば $e_0=0$　$k=s$

例えば $k=\dfrac{s}{2}$，$s=2k$　$e_0=0$

例えば $s=k$ としても $e_0=k\dfrac{y_0}{2}$ となる。

なお $s>k$ の貸与は 全然は ~~全~~ m を全く増加しない，このような場合は 寄付 ~~的~~ 性のカンニングである

このような貸与を可能にすることは 修学困難な者には ~~学~~ 修学困難を

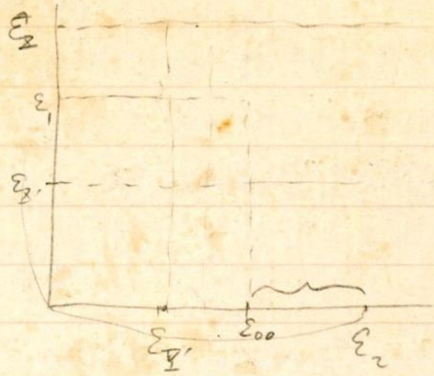
経済的に必要な額を決して全く考慮しないことになり 明らかに不合理である。 ~~学~~ 今の目的に無関係な貸与をも

可能であるということになり

なお ~~即~~ $\dfrac{dm}{ds}>\varepsilon_0$ 即ちいかなる貸与額も それによって

発生する m が或る値以上であると みなされるもの 行われると 規定する

$\varepsilon^2 = \varepsilon_1 \varepsilon_2$

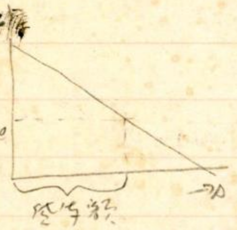


限界効率 ε_0^2

$\frac{\varepsilon_0^2}{\varepsilon_1} = \varepsilon_{00}$

$\varepsilon_2 \rightarrow s$ を増して ε_{00} まで

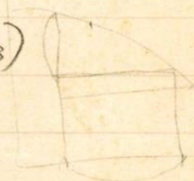
$$\varepsilon_2 = \frac{dn}{ds} = \frac{dt}{ds} \cdot \frac{dn}{dt} = \frac{1}{d} \cdot \frac{t_0}{t_m} \cdot \frac{\mathrm{I}_m}{} (K - s)$$



$$\varepsilon_{00} = \frac{\varepsilon_0^2}{\varepsilon_1}$$

次に $\varepsilon = \frac{dm}{ds}$ について

◎ 学資の給与によって国家有用の人材を育成する（が育成されること）　$\left(\frac{m}{s}\right.$ が成立する$\left.\right)$ → $\frac{m}{s} > 0$

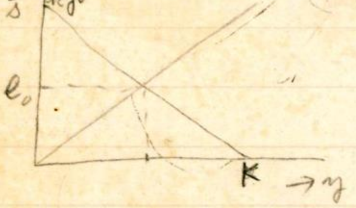


○ 給与は修学困難な者になされる →（経済的理由による）

このことは もし 給与額に比して m が小さいのは（修学可能でない者に給与された場合は）（即ち $\frac{m}{s} > e_0$ が必要）（不確実である）

即ち $\frac{m - m_0}{s}$（は y に比例する，$\frac{m - m_0}{s} > e_0$

$kKs - 2kKs^2$



$$\frac{m - m_0}{s} = ky$$

$$= k \frac{y_0}{K}(K - s)$$

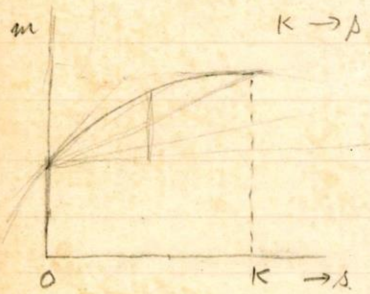
$$m = \frac{k y_0 s}{K}(K - s)$$

$$\frac{dm}{ds} = -\frac{k y_0}{K}$$

$$\frac{dm}{ds} = \frac{k y_0}{K}(K - 2s)$$

$$\frac{dm}{ds} = 0 \qquad K = 2s$$

$$s = K/2$$



$$\frac{m}{s} = ky$$

（給与額にかかわらず成立するから）

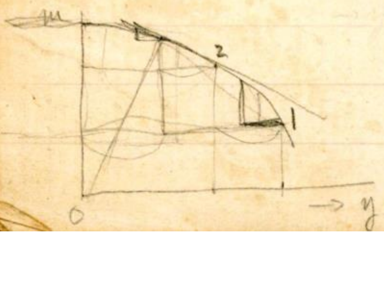
$\left(\frac{dm}{ds} = ky\right.$ となる

$y = 2x$

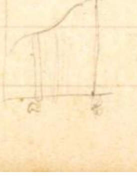
$$\frac{m_s - m_0}{s} = ky$$

$m_s - m_0 = k \frac{y_0}{K}(K - s)$

今，$\frac{m_s - m_0}{s} > e_0$ とする　$\frac{dm}{ds} > e_0$ とはならないか



$$\frac{m_{s1} - m_{01}}{m_{s2} - m_{02}} = 2$$



$\int_a^b f(x)\,dx$

~~修学困難な者には~~、~~$y > \bar{Y}'$ の者には s の増加によって $y < \bar{Y}'$ までも行えるか~~

学資の投下は経済的理由による修学困難な者になされる → この根本精神は ~~投下~~ に考えられるからである

y が大きい場合に比べ投下の効果は顕著である
もし投下が y の小の者に行われるならば 投下は投下額に比して m が小さいのは予想であり

~~それ~~ 投下額に対する国家有用の人材の増加分は y が大きいほど大きい ~~(?)~~ (何となれば)

しかして 前者のような ~~このような~~ 投下は国家の観点から出来ないから 投下は y のある値以上の者 即ち修学困難以上の者になされる(これを $\bar{Y}'$ とする)。投下額を s、投下による国家有用の人材の増加分を Δm とすれば

$$\frac{\Delta m}{s} = k\cdot y \qquad (kは比例常数)$$

$$\left(\frac{\Delta m}{s} > k y_e = e_0\right)$$

上の関係は投下額(総額)の場合にでも成立つから $\frac{dm}{ds} = ky$ 　 $\frac{dm}{ds} = \varepsilon$ (投下の効率という)

とすれば 投下の効率は(経済的理由による)修学困難が大きいほど大きいということになる

次に投下は $y > \bar{Y}'$ の場合になされるから、(総額の)投下のための最低の効率を ε_0 とすれば

$\varepsilon_0 = k\bar{Y}'$，即ち $\varepsilon > \varepsilon_0$ の場合に投下はなされる (ε₀を限界効率とする)

次に投下額がある大きさをもった場合について ~~効率即ち $\frac{\Delta m}{s}$ について~~ 考察する

「学資の投下によって経済的理由による修学困難は一般に減少する」と仮定すれば 投下額の増加によって y は減少し、ε は減少し(大なの y の値における) ~~ε も減少する 同様に~~ $\frac{\Delta m}{s}$ も減少する

ε はやがて ε_0 に等しくなるが $\frac{\Delta m}{s}$ は ε_0 より大きい (その時の)

(即ち $\varepsilon > \varepsilon_0$)
$y > \bar{Y}'$ の者に投下(総額)を行われはやがて $y = \bar{Y}'$，$\varepsilon = \varepsilon_0$ になる，併しこのときの平均効率

$\frac{\Delta m}{s}$ は限界効率 ε_0 より大きい なにもし ~~ε₀と~~ (限界効率の対案と) 平均効率におけば

$$\frac{dm}{ds} = k\frac{y_0}{k}(k-s)$$

$$m = \int_0^s k\frac{y_0}{k}(k-s)\,ds$$

$$= m_0 + k\frac{y_0}{k}s\left(k-\frac{s}{2}\right)$$

$$\frac{k\frac{y_0}{k}s\left(k-\frac{s}{2}\right)}{s} > e_0$$

$$\left\{\begin{array}{l} k\frac{y_0}{k}\left(k-\frac{s}{2}\right) > e_0 \\ k\frac{y_0}{k}(k-s) > e_0 \end{array}\right.$$

or $\frac{dm}{ds} > e_0$

$$k\frac{y_0}{k}(k-s) > e_0$$

例えば $k = s$ 　 $e_0 = 0$ 　 $e_0 = 0$ 　 $k = s$

例えば $s = k$ としても $e_0 = k\frac{y_0}{2}$ となる

なお $s > k$ の投下は 算術的には m を全く増加しない，このような場合は教育のカンテンである

このような投下を可能にするとは 修学困難な者には修学困難を 経済的に過重な額を決して全く 学業の自由に無関係な投下をも可能であるということになり 明らかに不合理である，

なお $\frac{dm}{ds} > e_0$ 即ちいかなる投下額も それによって 経済的にその効率以上であるとみなされることをせん 行われると規定する

今この限界効率を e_0 とする

貸与は 貸与額と 目的達成量 との比が ある値以上の場合に行われる …… (1)

〃 償還困難な者になされる (2)

貸与によって償還困難は減少する (3)

貸与の効果は y に比例する

貸与は効率があ

(1) $\frac{\Delta m}{s} = \varepsilon_0$ とする

$\frac{\Delta m}{s} = k y$

y は s の増加と共に減少する

$y \geq Y'$ の場合に貸与がなされる

$\varepsilon_0 = k Y'$ となる

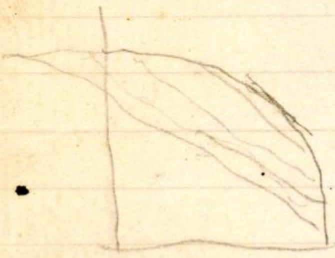
結論. 貸与は、そのうちのいかなる貸与の額も、その効果が e_0 より大きいことが必要である

仮説1、 貸与は 育英会法の目的達成量を 最大ならしめるように行うものとする

(1) から

$\frac{\Delta m}{s} \geq e_0$ であればよい　今 全体 $\frac{\Delta m}{s_a} = e_0$ であったとする

(3)



s_1 m_1

s_2 m_2

$s_1 + s_2 + \cdots = S$　$m_1 + m_2 + \cdots = M$.

$\frac{\Delta m}{s} \geq e_0$ の形で貸与 (された者のうち) $\frac{M}{S}$ を最大ならしめることが必要である.

今 ~~任意の~~ ある者 ~~者~~ s_p (Δs_p による m の増加を m_p とする) から貸与の額 ds を減じて 他のある者 s_q (同様に m_q とする) に増加したと

したとき ~~s_p~~ m_p から dm_p が減じ m_q に dm_q が増したと ~~すれば~~ する

もし

なに

◎ 2

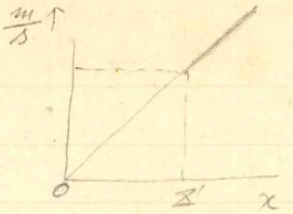
$$\begin{cases} \dfrac{m}{s} = k_1 x \\ m = k_1 x s \\ \dfrac{dm}{ds} = k_1 x \end{cases}$$

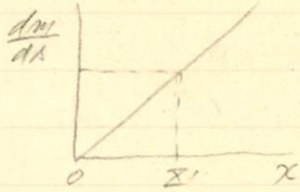
$\dfrac{m}{s} = k_1 X'$

$m = k_1 X' s$

$\dfrac{dm}{ds} =$

e'





$x \geq X'$

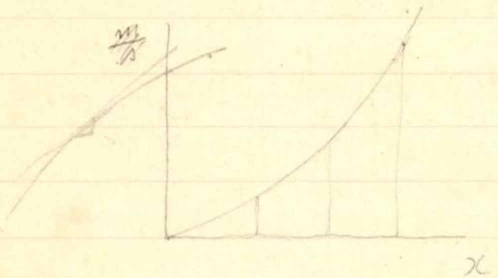
$y \geq Y'$

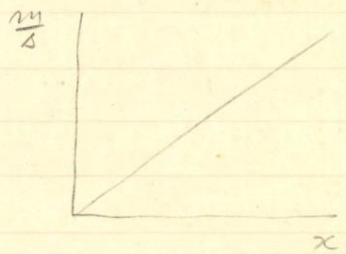
$e > 0$

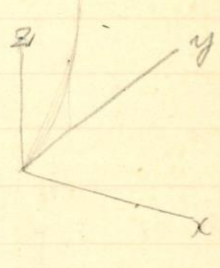
$\dfrac{M}{S}$ を最大にする。 ----- $\dfrac{dm}{ds} \geq \varepsilon_0$

$$\begin{cases} e = k_1 x \\ e = k_2 y \end{cases} \rightarrow \begin{cases} \varepsilon = k_1 x & \varepsilon_1 = k_1 X' \\ \varepsilon = k_2 y & \varepsilon_2 = k_2 Y' \end{cases} \quad \varepsilon^2 = \underbrace{k_1 x}_{\varepsilon_1},\ \underbrace{k_2 y}_{\varepsilon_2}$$

$$\begin{cases} e \geq k_1 X' \\ e \geq k_2 Y' \\ e \geq e_0 \end{cases} \qquad \varepsilon \geq \varepsilon_0$$







$\dfrac{m}{s} = k_1 x$

$m = k_1 x s$

$\dfrac{dm}{ds} = k_1 x$

故に $\dfrac{m}{s} = \dfrac{dm}{ds}$

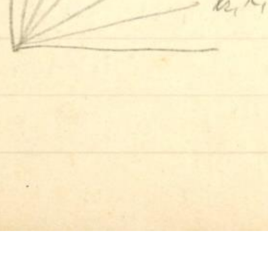
$\dfrac{Z}{y} = k_1 x$

$Z = k_1 x y$

$\dfrac{dZ}{dy} = k_1 x$

故に $\dfrac{Z}{y} = \dfrac{dZ}{dy}$

$\dfrac{dm}{ds} = k_1 x$



$\dfrac{dm}{ds} = \varepsilon_0$

$\dfrac{dm}{ds} = \dfrac{m}{s}$

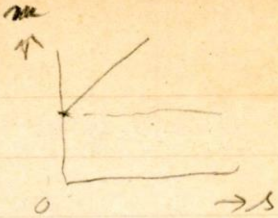
$\dfrac{m}{s} \geq e_0$ 　一般の場合では

$\therefore\ \varepsilon_0 \geq e_0$ 　故に $\dfrac{dm}{ds} \geq e_0$

$$\begin{cases} \dfrac{dy}{dx} \doteqdot k \\ \dfrac{dy}{dx} = a \quad \text{-------- (1)} \\ \dfrac{dy}{dx} = b(c-x) \quad \text{---- (2)} \end{cases}$$

$$\frac{dm}{ds} = k_1 x$$

$$m = m_0 + k_1 x \cdot s$$



(1) より

$$y = y_0 + ax$$

$$y = y_0 + bcx - \frac{1}{2}bx^2$$

$$x = a$$

$$x = b$$

$$2x = a + b$$

$$x^2 \doteqdot ab$$

二つの條件が兼備されねばならぬ

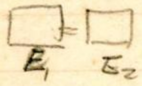
① 両立しなくてはならないという場合に 綜合されたものが積であらわされねばならないということの証明（和でなくて）

例えば 面積 (S) は 縦 (a) に比例し 且つ 横 (b) に比例する

$$\begin{cases} S = k_1 a \\ S = k_2 b \end{cases} \qquad \begin{cases} 2S = k_1 a + k_2 b = \\ S^2 = k_1 k_2 ab = \end{cases}$$

$$\frac{k_1}{k_2} = \frac{b}{a}$$

ガソリンエンジン 効率 $E = \dfrac{\text{電力}}{\text{ガソリン}} = E_1 \times E_2$ ---- この証明 これは出来る



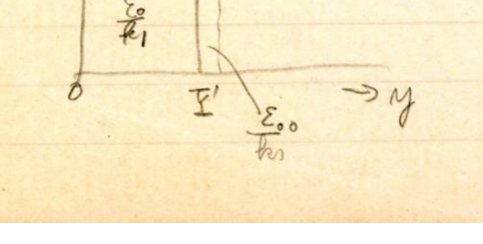
何故 和ではいけないのか

理論的方面

⑥ 温度の変化に堪えるための處置， 一部

~~Σは x, y の函数とし~~ $\varepsilon = f(x, y)$ とし x（又は y）の値にかかわらず y（又は x）＝0 のときは $\varepsilon = 0$ となるような函数関係の最も簡単なものは $\varepsilon = k_1 x.y$ であるから 簡単のためそう考えておく

k_1 は ε と xy との 関係を あらわせるための 常数と考えてよい



効率を考えて 調べ x, y, S (s) との関連が出来る

容積とは 何らかの値による m 量 即ち $\dfrac{dm}{ds}$ と考えてよい 容積は s によって変化する

日本育英会は、優秀なる学徒にして、経済的理由により修学困難なる者に対し、学資の貸与を行い、もつて国家有用の人材を育成することを目的とす。

◎今としては 奨学生が無事に卒業しているか どうかが一番知りたい

◎人物さえつくればよいのだから 免除されねばおかしい

勉強ではゆかない

◎優秀である…… 国家有用なる人材への 有効成分. 微分.

パチンコに優秀である.

この中に優秀なる素質,

優秀なる修学意欲.

◎(修学意欲がありながらも 修学が出来ない

修学が出来なくても 学校との関係において 大したことはない → 脱落する

小学校と大学の差.) maxにする

各人の仕事 → 合力) ∠ 微分方程式

教官 Σ 事務局.

Σを入れることによって右あがりに maxになる

$\frac{dP}{ds} \rightarrow max$

従来は Σ ~~は~~ (はあつたそれを) 教官がやっていた, 旧制高校 と 新大の差

新しい教育理念によって Σが強調された

新大によって 先生方のΣをやることが 本質的で

なくなった. 教育的に問題. 東大への差

要 学長, エドワとの差

資本主義との関係. Σの max

資本主義と社会主義の合致点.

◎ 青天井でない

8月6日 午后.

大学における 自分達の位置. weight, を妄想しているか.

同志社 … 人物判定は 学生部

岩手大学 … 判定で 教官とうまくゆかない場合がある.
入寮ではなさそうだ

慶応 … ~~[illegible]~~ 組織のかない 教官がある. 毎月業務報告をさす
だんだんよくなってきた.

宮城・農短大 ….

8月7日 午前 厚生補導の組織

どの大学にも あてはまるという ものはない ことが アメリカへいって わかった

1、組織の性格

機能が分化し それが全体の目的を達するように どこかで まとまっている

即ち 分化—統合 Organization, 有機的なつながり.
生きている. もし 組織の中で 全体の目的をこわすようなものがあれば
それは ガンである

組織を 統合しまとめてゆく ことを 管理と云う Administration)

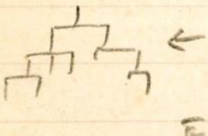
分化したものを 全体の目的のために 統合する 権力の行使

反に 民主的には 権力のないこと → 管理のないこと. 民主的と[illegible] しない

権力の よってきたる 経路のちがい

野球の例. Captain の選出と Cap. の権力行使. → 管理.
人々の自由意思を 100% みとめない.

民主的の 名のもとに 管理があいまいになる

 ← こういう これは 長短がある

長 1) 専門化, 能率化 ——→ 機能的組織 functional …org.
(もちはもちや)
2) 系統化されてくる → バクゼンたる責任は 無責任. 総合の権限

短 … 何事によらず 欠点がある.

1)の短, 全体の目的を忘れて 独走して 一人歩きをする傾向がある

管理的ということは 組織そのものにあって 人にあるのではない.

長年やっていると 自分が偉いから やっているのだという 錯覚をもつ

2)の欠点 ― 形式化、事務的。

非人格化 → 明日までに掲示したい。お前は手続を知らないのか。課長→部長

いつでも常識の線で立てなおせなくてはならない

2. 組織化の方法。

司法的、立法的、行政的性格　アメリカの学生ははっきりわけている。

→役割の相関

方針、規則の実現を監視する（カンサ役）

方針を立てる（株主総会）

方針に従って実際に執行してゆく（取締役）

分立…この観点から物事をみる。

立法 → ~~衆~~知を集める、参加（学生の自治権） ← きめたことを擁護っていては責任をとる

行政 → 適用、判断　権限 ← 責任　　きめられていないことに責任をとらせるのはコクである

司法 → 大学では行政がかねている場合が多い

補導委員会と学生部長

型

Ⓐ型…機能的、目的的な分化のしかた

非権力的 技術的権威　補導局、学生部、保健委…技術が高いということを人がみとめる、サービス的性格、専門的権威が

Ⓑ型…対象的分化…場所と施設　　質は高くならない、人間的なむすびつき

権力的 責任と権限　学部、図書、クラス制、寮室

Ⓐ　補導　　厚生

↓　　　↓

Ⓑ　自治会　寮

} 目下本省で審議中

Ⓐ とⒷ とが縦横に入りこむべきだ。そうなっているか

3. 組織の運営

悪いところをどうやってのりこえてゆくか。悪くならないようにするか

統合の回復

統合の回復 ／ 全体の中での自分の役割
人間関係をなおす
連絡会　人事交流
Case study method

（研修会のねらい）
バラバラになるのを
防ぐため

{ line org. 縦
staff org 横

アメリカの実例.　ミネソタ大学の厚生補導の組織　ウイルアムソン
アメリカの大学でも うまくいっていない大学が多い.
ミネソタ大学は パイオニア的存在　too much Organizased
と、ひやかされている
学生 2万　総合大学.

Dean of Students.（学生部長）
office of....　学生部.
部長が先で学生部が出来た　学長の下，学部長の上

Dean
- counseling　ビューロー　Test
- activi
- House
- Voca
- Study Skill → 読書力, しゃべり力.
- 経済相談 → 生活設計を合理的に立てさせる, 収入の工面
- アルバイト
- 結婚

学部 - 指導教官 → 指導教官制の所もある

奨学金
アルバイト... 指導
　　　　　　　　細目を
　　　　　　　　しらべる.

動かしてゆき方に参考になる点が多い

寮　Adm 事務局 → Director 家主
(主婦)
Head of Comm.
Student Comm.
見本だともいえるし, 主客転倒ともいえる

アメリカでは. 教授. 助教授 助手
補導職員, Personal worker. ... この中には教官を兼務している人もいる
事務官

自治会そのものを全学の司法委員会（学生も入っている）に委ねる.
→ 自治会がその権能をもっていない.

午前後半

午後　パネル、　10〜15人まで　意志の疎通をはかる。

多数の人がやるには、パネル、とかシンポジウムがある。

意見をつみかさねてゆく。

小さい演説をする。
あとで皆さんどうですかとやる
ムズムズしている人が手をあげる。

討論会…二派にわかれる。

一般学生、が理解されていない。

○ 棚ざらしになった問題点、多くの問題を一度にやれないときは特に重要なものに限定する。
○ みな意見を出さないと問題がダイナミックに発展しない
○ 自分の思っていることを簡潔にいう訓練がされていない → 明確に発表しない
○ 一人の発言が30秒位。
○ フンイキはよかった。

午後、

高知、教官はタッチすべきか → どこまでタッチすべきか　旧制高校。
事務屋にまかせている。

東北、
秋田 → 学部でも本部からある。

宮崎農短大、割に重要視されている、教官からの反バツがある、人の問題は別として。

「君この アルバイトをやれば 授業がこまるではないか」をいえるかどうか

アルバイトのエチケットを（学生部職員が）いえるかどうか。

他の事務局に入ればよかったと思う

処方⟷技術書の誤り

例. その点に ~~使用者~~ ~~誤れる使用法か~~ 責任が 使用者にあるか メーカーにあるか

~~新発売のよくきく薬~~、~~[illegible]~~ を、子供にのませたところ、それに毒が入っていて、子供が死んだ
一流メーカーの牛乳 .

麻ザイルならば 切断しなかったとみなされることは ザイル

ザイル 切断の原因は 誤れる 使用法でなくて、メーカーが 発売前に 新発売のナイロンザイルの 持つ 欠陥に気付かず ~~[illegible]~~ 欠陥 ~~(おそらく一般のナイロンザイル~~ ~~[illegible]~~ 新製品ナイロンザイルが ~~発売した~~ 発売にあたって

をもっていた点にあると みなすことが出来る

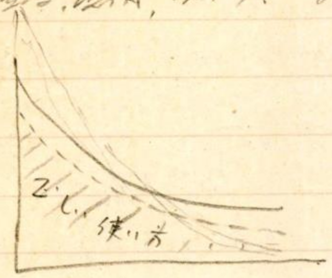
を明らかになしえなかった点に あると みなす ことが出来る.

(ナイロンザイル ~~[illegible]~~ の欠カンが あったと思われるがこの点は 一 に記す)

ザイルであるという保証

薬でも同じ。同じように使っても 大人の場合は正しいが 小供の場合は誤れる使用法
又ある特殊の素質の人には 誤れる使用法 ということになる

温度、湿気、スプク、等の影響



{あまり大きな墜落をしてはいけない
{あまり鋭い岩角にかけてはいけない

上記の表現に 左の関係は示されている もとより その限界点は ~~従来~~ ~~もとより~~ 経験則によって ~~やってきたのである~~ 明らかでない

従って、ザイルの保ゆう 使いなし等を 今まで 従来 経験則によってやってきたのである。又 今後も そのような部分が多いであろう 而して 同一実験によって 我々の経験則は 麻ザイルの場合ならば正しかったといえるのである。

故に 問題は ナイロンザイルが麻ザイルに比して 弱点を もつということ 知らなかったという ナイロンザイルが従来の経験則に あてはまらなかったという点にある 即ち 使用者が 結果的にいえば 点にある、換言すれば ナイロンザイルは 少くとも麻ザイルと 従来の登山での使用において 範囲 同等の強さをもつと 誤認した点にある。

このことは 同様に ザイルメーカーにもいえる。メーカーが、新製品のザイルが、従来のザイルに比して そのような欠点をもっていることを 知らなかったという点にある、而して (これは重要な欠カンであるので その点が 事前に明らかにされれば 使はなかったであろう) もしも しっておれば、その点を 明らかにして 販売したであろう

~~故に~~ この欠陥が 予め 発見出来なかったことが 事故の原因であるが、将来において ここで明らかにしておかねばならないことは、この欠陥を 発見 ~~する~~ すべき 責任の (発見出来るか発見出来ないかは別として) メーカーと使用者のもとでは メーカーにあるということである、(使用者にある) 一般に テストの道具を 持つ 筈のない 使用者は 一流メーカーが ザイル ~~である~~ であるといえば、それを (従来の経験則で行) 信用 ~~する~~ するより他に道は ないのである、これに反し メーカーは ~~新製品~~ 特にそのものの 用途を考えて、~~欠カン~~ ~~があるかどうか~~ 緊張せる 注意力のもとに 欠カンの 発見に 努力する 義務がある 筈である。こういう 用途の ものが メーカーにおいて 何ら 欠カン 発見のための テスト 努力なく 販売されてよい 筈は ないのである (薬、食料品を 考えてよい

↳ 使用者において テストの方法なし

一流メーカーの 販売する 新発売の よくきく 薬 ← 欠カンに対する 発見の努力.

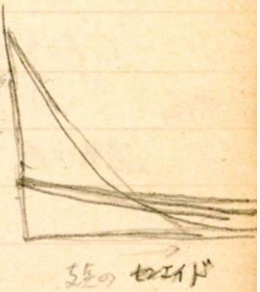
ザイル切断の原因究明に重要な問題があるとみなされる実験

ザイル切断に関する考察

1) 鋭刃
2) ヤスリ
3) 製品むらの有無
4) 木製ヤグラ
5) 匝木

トップのフイラクをみなしえない
いわゆるするどい角ではない
一ヶ所だけでも鋭ければ
岩場では使用していけない。
ダブルにする
秋の場合、墜落者が
岩田氏、南山路氏、　全部実験

経験則
より の問題
{ナイロン製品
アミとより



すべてザイルそのものが悪いのではない ——→ 必ず使用法が悪い
例えば一部だけ弱かったとしても、それを知らなかった使用者が悪い

岩角がない場合でも あまり大きな墜落をしてはいけない

あまりするどい岩角にかけてはいけない
岩角にかけることはよいか？
→ するどければするどいほど衝撃抗力は減ずる、　$1200^{kg} \times 0.15 \times 0.4 = 72^{kgm}/_{m}$　15.5
安全な墜落距離は減ずる
→ 岩角にかけた場合は そのするどさによって支点からの（滑動を含め）墜落距離をかえねばならない

12
15
60
12
180
4
72
40
42

36 kgm

600
66
24
24
26.4 kgm
26.4/60 = 0.44

→ 岩登会の場合、この問題を麻ザイルにおけるこの問題は
経験則として正しい知識をもっていたと考えられる

こういう岩角にかけた場合は、ケンスイも（下降）許される使用法
ということになる。

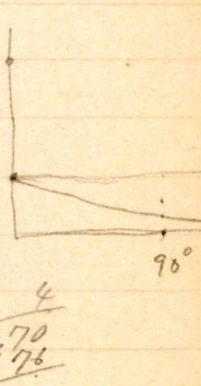
515
42
1030
60
2060
216
$73^{kgm}/60 = 1.2$
0.44

1030
60
61.8
2061.3

今後といえどもザイルを鋭い岩角にかけてよい、ただザイルの
性能をしっていて、このするどさならば
この程度の墜落はよい。このするどさならば
ケンスイ支点もいけない
という判断がつけばよい、但し一般に

毒の入っていた牛乳をのんで死んでも、牛
乳そのものが悪いのでなくて、使用者がそう
いう牛乳なということを知らなかったのが悪い

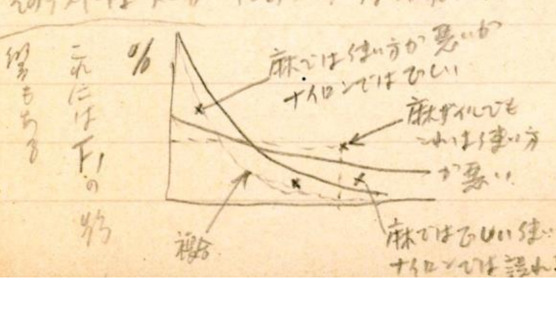
26.4 ÷ 1.7
15.5　1.70

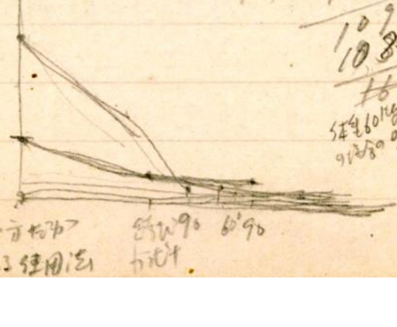


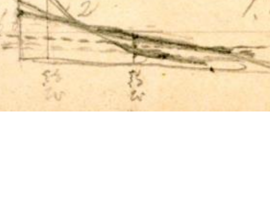
牛乳とは……にのんでよいものである。
そのテストはメーカーにあって、使用者にない。

15.5 | 26.4
15.5
1090
1085
160
5

0.44 | 1.70
1.76







1.7 | 1.20
1.19

民法 709条

故意又は過失によりて他人の権利を侵害したるものは之によりて生じたる損害を賠償する責に任ず

724条

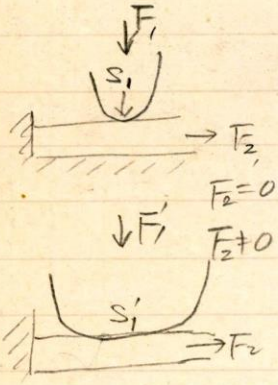
不法行為による損害賠償の請求権は被害者又は其法定代理人が損害及び加害者を知りたるときより三年間之を行わざるときは時効によりて消滅す

刑法

過失によりて人を死に致したる者は千円以下の罰金に処す

時効 3年　　50倍

○何故一般に静摩擦は動摩擦より大きいか？

○ 

顕微鏡なれば すべて集中荷重でゆくか！

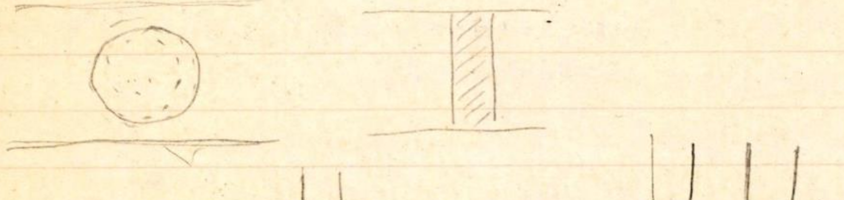
$f_1 = \frac{F_1}{S_1}$

○先端を丸くせずに線とする

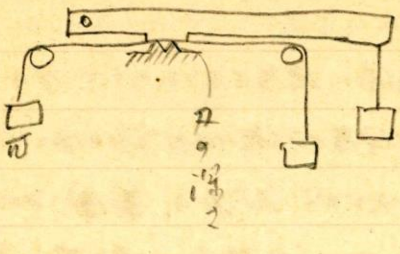
$F_2 = 0$ の場合

$F_2 \neq 0$ の場合

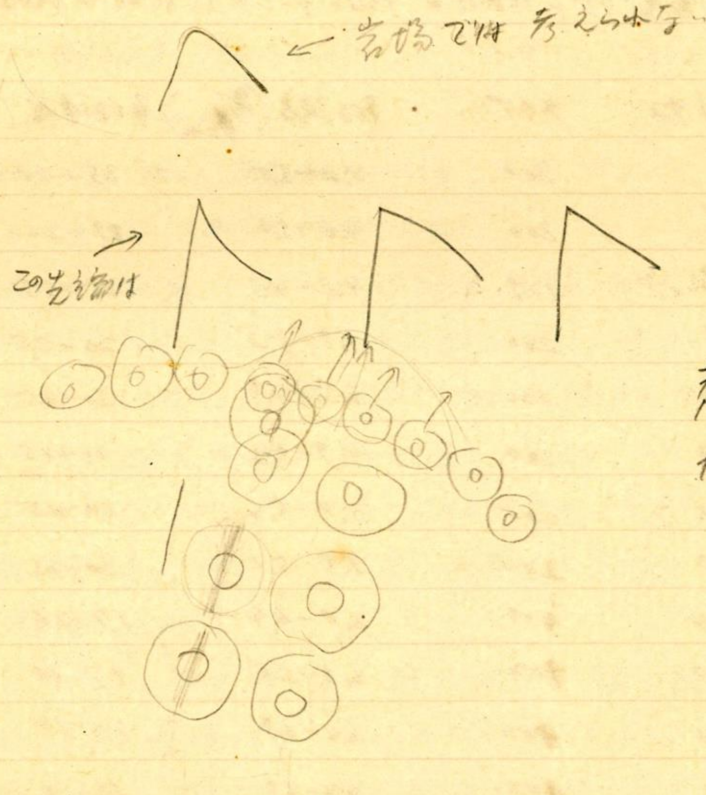
$f_1' = \frac{F_1'}{S_1'}$



○雪は何故傷がつくか、 変形するのとは異る 変形

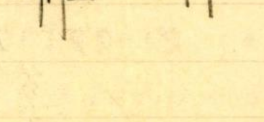


$\frac{F_2}{F_1}$ ~~あああ~~ M, 速度の関係でとびが起る　刃の深さ, 鋭利の度合, と V との関係で えぐれ と 切りこみ との関係がきまる



熱運動は往復運動か回転運動か?

◎ ひっぱりか ナイロン, ゴムのようなものでは 刃にそれ〜集中荷重となりやすい



ナイロンの定義.
ナイロン(Nylon. n) ― ポリマーの鎖の主要な一部分としてアミド基が繰返されていて且つ.ポリマーの構成分子が繊維軸の方向に配列されて.フィラメントを形成しうる長鎖状合成ポリアミドに対する総称である.
~~ナイロンという言葉は筆た.~~

ナイロン.テクニカルサービス No.2　物理的化学的な性質　東洋レーヨン

P1. 抗張力と伸度

ナイロンヤーンは比較的高い強度をもったもの或は低い強度をもったものを望み通りに製造することが出来る. どんなタイプのナイロンでも切断伸度が低ければ低いほど強度は強くなる ナイロンヤーンは通常平均強度. デニール当り 4.5から7.5gの範囲. 平均伸度. 15~45%の範囲に作られている. 完全にぬれているナイロンの強度は乾燥(調湿)時の80~90%であり. 伸度は 5~30% 大きい.

相対湿度. 72%. 温度 72°F における ナイロン.ヤーンの代表的な物理的性質は次の如くである.

デニール.	フィラメント数.	タイプ	平均強度.(g/デニール)	平均伸度.(%)
15	1	200	5.2~5.5	25—28
20	7	200	4.6—5.0	19-22
20	20	109	4.2—4.6	45—55
30	10	200	4.8-5.2	20—25
40	13	200	4.5—4.8	20—25
40	37	200	4.9—5.3	20—25
60	20	200	5.0—5.4	20—25
70	23	200	4.8—5.2	20—25
70	34	$\overset{3}{4}00$	6.0—6.4	17-22
70	34	400	6.2—6.6	17-20
100	34	300	6.4—6.8	16-19
100	34	400	6.4—6.8	16-19
150	68	$\overset{3}{4}00$	6.1—6.5	18-21
150	68	400	6.0—6.4	19-22
200	34	400	7.3—7.7	14-16
200	34	500	5.1—5.5	19-22
210	34	300	7.3—7.7	14-16

極度に冷却した場合の影響.

標準強度及び高強度のヤーンをドライアイスで冷却(約-80°C)した場合. 強度の減少は認められないが伸度は僅か減少する. ナイロンロープは -40°C で6時間冷却しておいても強度の減少は示さないし 又これを常温に上げた時も元の強度と変りない.

高温の影響

ナイロンヤーンは高温においては常温におけるより低い強度を示す。之は瞬間的な影響であって高温において酸素中に長くバクロしておいた時に強度が低下することとは何等関係はない。次の表は温度の変化と共にナイロンヤーンの物理的性質の変化を示したものである

タイプ 300. ヤーン. ※(70-23-300)の温度の函数としての物理的性質

温度(℃)	-34.5	25	85	135
強度(グラム/デニール)	8.2	7.1	6.2	5.0
伸度(%)	10.5	12.0	—	—
1%延伸するに要する荷重(グラム/デニール)	0.68	0.42	—	—
衝撃強度(グラム・センチ/デニール)	15.1	13.8	170℃迄は大体一定	

※タイプ 300ヤーンはブライト、高強力のヤーンである。

長くその温度にバクロしておいた場合ではない

はげしく収縮の起る状態(例えば沸騰水、或は175℃以上で乾燥加熱する時)の下で収縮を防ぐには デニール当り約0.4gの張力が必要である。ちなみにナイロンヤーンを収縮が起きないように必要且つ充分な張力をかけておしつぶすことのできない管に捲くか、或は頑丈な枠に張ったような場合、これをはげしい収縮がおこる條件の下にバクロするならば デニール当り約0.4gの張力が発生する。

P.4. 高温の空気(酸素)はナイロンの強度低下の原因となる。

P5. 摩擦~~強度~~抵抗

ナイロンの製品については一般に摩擦に強い。時には驚く程丈夫であることを経験する。ナイロンのかかる高い耐摩擦性は必ずしもナイロンを使用することによる必然の結果ではなく最終使用目的において織物その他の製品として適したデザインと構成とがきわめて重要である。

ナイロン紡績糸から造られた織物はある使用目的においては連続フィラメントヤーンからの織物よりも強い摩擦抵抗をもっている。このことはナイロン紡績糸からの織物が同じ重量の連続フィラメントの織物よりも弱いという事実があるにも拘らず真である。

実験室における摩擦試験ではナイロンステープルに羊毛或は綿繊維と混合するとそのナイロンの混合量が適当量のときは勿論、少量混じただけでも著しく摩擦抵抗が改善されるという結果になっている。

ナイロン剛毛の歯ブラシは一般に天然剛毛から造られた歯ブラシの数倍の寿命がある。……

紡績機械のドライブロープは1年経っても変化ないが綿のは1日で駄目になる。

耐光性.

ナイロン糸を日光に露出したら品質低下する点では、他の繊維と同様である。これは或る範囲の波長の紫外線のためおきる.

ナイロンが日光によるこの品質低下にどの程度耐えるかは次の諸因子による.

1) ブライト or セミダル（白色顔料添加）
2) 糸又は織物の厚さ
3) 構成単糸の太さ
4) 日光露出時間.
5) 季節.
6) 温度.
7) 作用紫外線の強度.
8) 直射日光か 例えばガラス越しか.

数年間行ってきた各種ナイロンの耐光性及び他繊維との比較に関する試験結果から次の結論をえた

1) 多くの用途において品質低下の日光に基く割合は僅かであり. むしろ他のことが支配的な原因である
2). ブライトナイロンはセミダルナイロンよりはるかに耐光性が大である.
3). 単糸フイラメントが3から9デニールの間では単糸フイラメントの太いもの程耐光性は大きい
4). 木綿と麻とは ブライトナイロン 特に単糸フイラメントが6−9デニールの糸と日光露出による強度低下の割合がよく似ている. 一般に使用可能な期間中ではブライトナイロンの強度は木綿. 麻. その他の普通の繊維の強度よりいつも高い 通常は伸度の減少が強度低下に伴っておきる.
5). 日光による品質低下は夏季は冬季~~より~~の数倍速くおきる

網.

ナイロンとマニラ麻の網について戸外曝露試験を行った処. 強度低下速度の割合は同じであった. 即ち曝露一年後においても ナイロン製の網はマニラ製の網より初めに強かった割合と同じ割合だけ強かった.

着色 ナイロンを日光に当てても黄色に着色することはなかった. これはフロリダの強い日光に当てたものである.

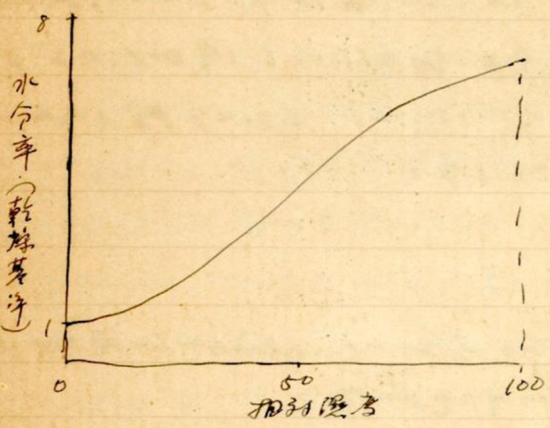
P15. 水は室温においてはナイロン繊維の横方向の膨潤を起させない.

P17 相対湿度の影響. ─ 略.

P21. 吸湿性.

各種の相対湿度中におけるナイロンの吸湿量は 絹, 綿, 羊毛, ビスコース人絹, サクサン人絹等他の織物繊維に比してかなり低い, 次表は 相対湿度65%中における各種の一般繊維の水分率を示す.

繊維	65%湿度中の水分率
羊毛	16%
絹	11%
麻	8%
ナイロン	4%



100% 相対湿度中飽和, 及び完全乾燥の物を 72%相対湿度中に移すと 約20分で平衡に達する.
これに反し 450本の綿は 60〜85分要する

ナイロントレードリタリチャー. No.3. 東洋レーヨン

デニールは今のところ 1.5, 3, 6, 10, 15 カットは 1〜5吋. 1.5以下が研究されている.

ナイロンは クリンプする能力がある. → ふっくらした味を与える.

ナイロンと産業　　ナイロン繊維の色々な生産資材としての応用．デュポン

P5.　命の綱

若し，貴方にとって繊維の強度ということが重要な問題である場合に，次の写真の電線工夫の安全帯を軽々しく見過してはならない（写真略）

デュポンのナイロン繊維は，それを使った製品の強さを事実上二倍にする．その例がこれであるが，電線工夫はその強い摩擦強度のためにナイロンを愛好する．彼が上ったり降りたりする度に，その安全帯はガサガサの電柱と擦り合うことになる．更に悪いことは，金属性の部分のガサガサの縁ともすれ合う．試験結果では普通の帯の三倍もナイロン帯は堪える．このナイロン帯はデュポンの合成ゴムネオプレーンをしみこませてある．この塗剤との結合はその耐久力も増加せしめる．ナイロンもネオプレーンも共に電線工夫が電柱からくっついたクレオソートをとり除くために使用する．しみぬき用液のために損傷をこうむることはない．

P7.　ナイロンの特性．

強度．

ナイロンは既知の繊維のうちで最も強いものである．奇妙かもしれないが，その強さは，同じ太さの針金に等しく，大抵の場合同じ目方の針金より強い．

完全にぬれた時でもその強さは10～20%減ずるのみである．又112°Fの極寒に長期さらした場合その膨張率を増大してもその強度は変化しない　－－－－

P8.

摩擦強度

ナイロンは極めて頑丈である．頑丈という言葉を定義づけることは困難であるが，我々は荒っぽい使用に堪えるという意味に使いたいと思う．ナイロンは我々の定義づけた頑丈というもののよい例である．それは何度いためつけてみても依然元通りである．

ナイロンの頑強さというものは，その本来的強さと無限のしなやかさとナメラカな糸の面に由来する．従って　靴下や漁網や，抄紙用フェルトやコンベアーベルトにおいてすでに示しているが如く修繕や取替の手間やコスト……

…或る特種の使用目的において最大の摩擦強度を得るためには織物の適当な設計と構造の問題が重要となってくる．ナイロンを一寸混ぜただけでその織物の摩擦強度は大きく増大する

◎ なめらかな糸の面 → 熱セットとならないか

○ 太いナイロンは切りにくい　　◎ しなやかさ → これはどうなる.

○ 一本づつ切れるのは太いナイロンにならないのか.

○ ~~硬~~度との関係.

P10. デュポン・ナイロン繊維について記憶すべき

10ヶ條

(このうちの何かがあなたにとって役に立たないかどうか検討して下さい)

1). ナイロン糸はすぐれて大きな強力と, 軽さを持っている.

2) ナイロンは摩擦に強く耐久力は非凡に大きく裂けにくい

3). ナイロンは頑丈で堅固である

4). ナイロンは吸湿性が小さいので乾きが早い

5) ナイロンは熱固定が可能である

6) ナイロンは弾力を失うことなく何回も引っぱったりまげたりすることが出来る

7) ナイロンはアルカリや炭化水素に強い

8) ナイロンは汚れやカビに強く朽ちない

9) ナイロンは焔が拡がるのを防ぐ

10). ナイロンは肉体組織に無刺戟性である.

アミランの染色加工.

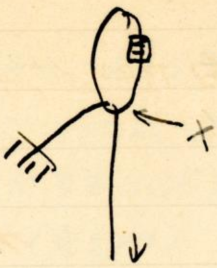
昭和29年1月.　　東洋レーヨン株式会社

P1.　アミラン(東洋レーヨンのナイロン)の染色加工.

アミランは米国デュポン社のナイロンと同じものと考えて良いわけですが染色性はむしろ優れて居り各種の染料に強い親和力を示します。・・・・

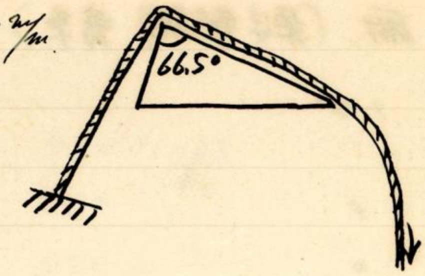
No. 10. カラビナ

麻 540



No. 11.
赤ナイロン
585K
540K.

No. 3. 双光 Test.　　白ナイロン 8 m/m
(着色ナシ)



鉄製
稜線はかなり
尖鋭、指でおしていたい.

78 K

1本断　90 K

2本断　98 K

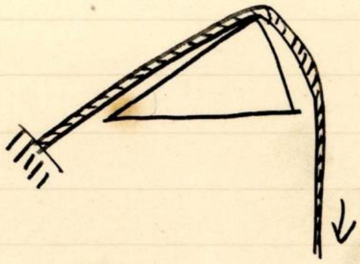
No. 4.　赤ナイロン（切れたガイル）

95 K　1本切
98 K　2本切

No. 4.　麻

193 K.

No. 5　白ナイロン



← ●ナイロン、一本づつ
ぶつぶつ切れる

58 K

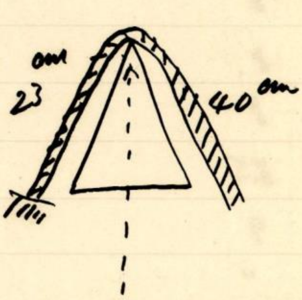
No. 6.　赤ナイロン

75 K

No 7　麻

196 K

No. 8　赤ナイロン
69 K
83 K



麻の場合、そもない　切れるとそう.

No. 9　麻

125 K.　2本目 86 K.

No.3.　麻。(東京製綱 青糸)。　三重国体の時 買ったもの。

加重.	1ビ
20	
40	1
60	〃
80	1.5
100	2
130	2.5
150	4
160	4.5
180	
200	5
220	〃
240	〃
250	5.5
70	〃
80	6.
90	6
300	6.5
320	〃
330	7
340	7
350	7.5
370	8
400	8
410	8
420	8.5
430	9
450	〃
490	〃
500	〃
510	X.　21回目. 430. (青なし. ボロボロ)

No. 2.　8 m/m　赤ナイロン

加重(kg)	ノビ m/m
20	1
40	4.5
50	5.5
70	9
90	11.5
100	13.5
120	14.5
140	16.5
150	17.5
180	19
200	20
220	21.5
230	22
250	23
280	24
300	25
320	25.5
350	26.5
380	27.5
400	28
420	28.5
440	30
460	30
480	30.5
500	32
510	〃
520	32.5
530	〃
540	〃
550	33
560	〃
570	33.5
580	×
490	よまり一本
327	最後

1月31日 九大において 1ton 用

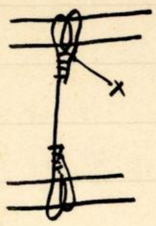
No.1. 白 8m/m ナイロン

加重	1ビ"
30	4
40	6
50	7
60	9
70	10
80	12
90	13.5
100	13.5
110	14.5
120	15.5
130	16.0
140	18.0
150	18.5
160	20.0
170	20.5
180	21
190	21.5
200	22.5
210	23.5
220	24
230	24.5
250	25.5
260	〃
280	26
300	27.5
320	28
350	30
380	31
400	32
420	32.5
440	34.5
480	34.
500	
513	×

1本残る.

1月30日　名大　　1 ton用

No.1　　白 8 m/m ナイロン



加重	伸
526	43
670	45

No.2　　　　　　　一重結び

10	0
25	3
35	5
50	8
70	10
90	13
105	15
155	20
200	22
250	25
300	29
400	32
495	35

一本切断。切口はナイフ状

330

400

430

二本切断

180

230

290.

文献、　正木ひろし（子どもについて27年の研究）
価値観念
なぜ社会主義を選ぶか！　ストレイチー　宮地健次郎訳　岩波
社会再組織の科学的基礎（コント）　岩
社会科学方法論　マックスウエーバー　〃
社会的人間論　清水　創元
社会科学への道　高島　弘文
法と自由
法律入門　我妻通孝

◎ 厚生補導の理念.

原因力、 教官 事務職員、 国立大学では 教官は 事務職員の仕事を行ってはならない

成果 原因力 環境係数

$$P_1 = A_1 \times g_1 \qquad 0 \le g \le 1.$$

優秀な卒業生 受入能力 原因力 環境係数 意欲の P_2分力 → 分力の増加が学生部の仕事

環境の良化.

$$P_2 = B_1 \times (A_2 \times g_2 + A_3 \times g_3)$$

互に影響を及ぼす可能性あり.

$$B_1 = b_1 \times b_2, \qquad 0 \le b_2 \le 1$$

要するに P_2 が Max になればよい

課外活動が法的にみとめられている以上

優秀な素質 勉学環境 $b_1 \ge b_0$ (入試により)

学生部の活動.

大学の目的 研究成果 優秀な卒業生をつくる.

$$P_1 = P_1 + P_2$$

{ マイナスを除去する マイナスには何かの判断 needs.

{ 直接+する 補導.

大学論　ドイツが盛　新明先生

文化的な面

哲学的であることを軽べつする思想→アメリカ

日本で戦後急増した。

研究と教授

これがうまくいっているかというとそうではない

専門家の弊害

全体をつなぐような教官がほしい

厚生補導の理念。　斯波先生

理念→哲学的意味をもち、非常に深い。

CIE→学生生活指導協議会、ホス

Text Book をつくること。学生補導の理論の定時

学生部活動

第三章

1) 入学に関する…　orientation。教官の仕事。

2) 個別のセンター

3) 就職アッセン

4) 学資

5) 課外

6) ホケン

7) 宗

8)

文部省　厚生補導に関する部

厚生、補導、教養のモデルを流した、井描図

組織　学生部……いろいろ通り
(70%)

CIE→アイヘルの仕事として　大学行政官講習会 (1)　東京大学で行われた。
昭和24年　(2)　この時初めて SPS という言葉が生まれた

昭和25年。ユース Guidance と Student G
とまとめた

Round Table discussion, Grupedynamics

昭和25年秋→夏

ロイド以下5名が 東京 京都 九州で

更に SPS 特別研修会 ロビンソン

学生部の仕事の本質は SPS ということがはっきりした

しかし SPS と厚生補導とは 完全に符合してはいない

SPSの適当な訳がない 助言

大学教育に必要かくべからざるものであることは確信していた

教育の新しい分野として

◎ 厚生補導の教育的理念

一種の Service

しかし 教育の一部であり 学問から離れた単なるサービスではない

サービス → 便宜を与えて 利益をうる

商業的な厚生補導は 大学における厚生補導とは異り

大学の教育理念にもとづいて行われている 学生へのサービス

教官も同じ

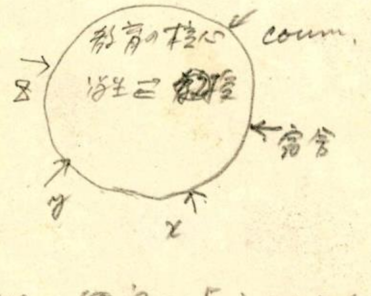
大学における厚生補導には

大学の教育理念は 訓育主義の方針にあったから 独立して進んでゆく

我々が行わんサービス活動は 個々の学生

SPSは 教育の核心にいたる 一つの道である ← アメリカの….

教授と学生の相互のつながり



カウンセラーは、学生に便宜を与えるとともに 教育的見地をもつ

教育の新しい
核心
学生 ⇄ counsel

心臓ばかりでなく、これにつらなる各部門も教育的効果をもたねばならぬ
宿舎、アルバイト等 → 教育的効果をたえず考えねばならない。
そうでないと単に消費に終る。
教育的見地を忘れてはいかん → 誰が教育するのか

アメリカ → カウンセリングは随所に行われる、学校、工場、軍隊…
しかし、学校とその他とは異る、ウヤムソン氏の説は正しいと考える、?
以上は理念の序である。
固定したものでなく
◎ SPSの教育的価値について二、三述べた…
1) 合理的思考方法の習得をうながす。
・カウンセリングによって自己自身を学ばせる。
いかにして学生の知識を生かして助言するか、又それをいかに効果的に
~~体系~~行われつつあるかを反省する
2) 社会過程
学生に考えさせるだけでなく、他の学生、教授、その他と協同活動をさせる。社会科の課程、孤立していて豊かになるはずはない。
課外活動の場が社会生活を豊かにする場である。そういうことを
理解して指導しないと空廻りになる。
アメリカでは課外活動の全責任を学生にまかせている ドイツのやり方を
排除している。 [illegible]
課外活動を重要視している
3) 個性の尊重。
4) 適切な発達のソク進
個々の学生の能力の適切なソク進 ← アメリカでは随所にみられる。
優学生も劣等生も共に指導する。

第四回研修会、東北大学、八月五日

式次第

一、開式

一、挨拶……黒川利雄

一、挨拶……斯波義慧 ↓ ニードと助言的見地

一、挨拶……西田亀久夫 ↓ 技術、技能を身に付ける。 厚生補導とは何か

一、閉式

二十年後に、大学生が我々の代弁をやってくれる。
ことは間違いない。どうすれば、効果的にやれるか。
問題の学生をとりあげるのでなくて、学生の問
題をとりあげる。
学生は多くの人々が それぞれの目的をもちながら 共同でやってゆくことを学ぶ
二面か欠点がある。よりよい日本をつくる事を
念願したい。我々がもっている経験がどうすれば
学生に役に立つか。我々は彼よりたよりになる
者がいないことを知る。

深川学生課長から助言者の紹介

これで終って

経過、 球川学生課長。

五月三十一日 二つ会の基礎

六月十日

七月、 参加法定の通知。

助言者の会議

運営上の二と

第二志望を考慮する。 12 12 6 7.

議長、記録員は一週間交代

三年事務主任

めで線をもうける言がむずかしい

学生にもある、線を教育という間でなくつづく

市民として、大学その制限があるように

シンポジウム。 外部的に許されている自治、学外が学生にもある ある段までは元でゆかれる自治と。

自治会…… 学内にあるから学外へ出てゆこうとする。 二十年、三十年の長い目。

(高橋) 真理と、実践。 学問の新しさ。 同一のレベルの上に立って、解決

するという行き方 それ以外にない。 市民科学、 そういう線が必要。

これが究極の問題につながっている。

一体何をすべきか、仕事に追いまくられているか [illegible]んでいるか と考えさせられる。

厚生活動を学問化する。オリエンテーションなど、（学問に対する感情）カウンセリング

効果をあげる。

十四日までに 200字詰 五枚程度

経験した事のなかから

学生を観察。

いろ〱な問題点を出す

発端

補導職員部会名簿

第1部会		第2部会		第3・4部会	
氏名	大学名	氏名	大学名	氏名	大学名
平野 馨	慶応義塾大学	佐藤秀臣	東北学院大学	宮部美充	慶応義塾大学
木村和雄	東北学院大学	吉沢七郎	宇都宮大学	木村次郎	山口女子短大
海老根義元	茨城キリスト教短大	柴 三九男	関東学院短大部	楠見恒伸	同志社大学
広井重美	山形大学	金子圭助	天理大学	松井金谷	岩手大学
野口辰一	長崎大学	村沢仙芳	弘前大学	鎌田八十三	秋田大学
堀口英一	駒沢大学	中西政敏	香川大学	丹治道男	福島県立医科大学
松本 豊	東京学芸大学	鈴木龍男	関西大学	小岩健介	宮城県農業短大
斎 実	東北大学	佐藤 稔	宮城県農業短大	石岡繁雄	名古屋大学
大橋清見	〃	杉原方平	明治大学	藤代ヒロ子	東北大学
高島永年	福島大学	島谷仁治	東北大学	吉岡英二	〃
今野きい	三島学園女子短大	津田 修	〃	斎藤秋雄	〃
富沢政一	宮城学院女子大学	植松 稔	中央大学	豊永基弘	高知短期大学
				金城敏勝	琉球大学

石岡繁雄兄

須賀太郎

昨夜はおそくまで失礼いたしました。とりあえず残金の二千円をお届けいたします。貴兄のお骨折りをお察しいたし　のんきな小生はたゞ恐縮するばかりです。またいづれおたづねしてお力添えいたゞきたいと思っております

昭和32年（1957年）9月1日（日曜日） ©（日刊）

東京タイムズ

発行所 東京都港区芝新橋2の1 東京タイムズ社 電話 代表 銀座(57) 4831・5121

新英才教育の問題点

危うい予算の裏付
返済にも無理がある

自民党は〝新〟文教政策として「英才教育」を打出してきた。頭のいい学童には高校から大学まで面倒をみてあげようというわけだ。育英資金のこのような「量」から「質」への転換については、大蔵省も好感をもっている。だが問題はこの金が給付でなくて貸す金であることだ。高校から大学まで約五十万円にのぼろうという借金を果して英才が返還できるだろうか。

昭和卅二年度に育英資金を借りている学生は全部で廿二万人、お金にして四十五億五百万円だがこれは日本育英会から借りているもので、民間の育英制度を利用している人を合わせるともう少し増える。このうち高校生は約八万人、全高校生の三㌫、大学生は十二万七千人、全大学生の二〇㌫、このほか大学院生の五千四百人、通信学生などが含まれている。借りる金は高校生で月千円、大学生は二千円または三千円ということになっている。金額は少いので大体学費の一部にあてているのが実情で、とても生活費には間に合わぬ。

このような中で育英資金の本当の意味を生かして、貧しい子どもに光を与えて上級学校へ進学させたらという計画が生まれてきた。それが最初に大阪府から始まった中学生の高校進学予約制度である。工業地帯をもつ大阪には、頭がよくても貧しい家庭の事情から中学卒業で高校進学をあきらめる学童が多い。そこで大阪府の育英会支部が昭和廿八年から高校に進学したら育英資金を必ず出しましょうという予約制度をはじめ、府下中学から頭のよい学童で家の貧しい子を選んだわけだ。これがはじめとなってその後、この予約制度は全国に広がり、愛知県をはじめ北は青森、宮城、山形、南は香川、熊本、大分など十五府県にのぼっている。そして今春の高校入試では千廿名の候補者のうち九百八十名が合格、育英資金を借りている。

自民党が新政策で打出したのはこの制度を拡充したものだ。まずこの高校予約制を全国で行いこれを大学の予約制にまで延長する。頭のよい学童は大学まで安心してゆけるようにしようというわけである。そして高校生のうち一万人を特別奨学生として、月一千円を三千円に増額し大学の予約生は約一万人としてこれには将来八千円を貸し、さらに五年間の博士課程に入るものには、現在月一万円貸しているところを全額あげてしまおうというプランである。

これに要する経費は、従来の奨学生の分を含めて、卅二年度予算に六十一億円ほど要求することになっているし、なかなか景気のよい予算だ。とくに博士課程は五年間貸していると総額六十万円となって、いくら博士さんでもこれを返すのは気の毒、科学技術振興の折から〝やってしまえ〟と六億円を奮発したという。

だが景気はいいと疑いたくなってくる。大蔵省も毎度育英資金の返還率の悪いことにヘソを曲げていた折でもあり、この量より質への貸出方法の転換には好感をもっている。しかし前年度より廿億円近くの増額にはしぶい顔をしている。そしてこの予約制を実施してゆくと、将来五十億円もの経費が必要となる。この財源を一体どうするかである。実際問題として高校から大学まで借りて五十万円もの金を返すことは、いくら英才でもちょっと苦痛であろう。卒業後生活苦で才能をつぶすことにもなりかねないわけだ。

しかし英才教育も必要だが、普通の教育を受けている子どもたちの義務教育水準の維持、〝すしづめ学級〟解消はどうなるのか。実際には六十億から九十億円の増額でできるというこの問題の方がむしろ一般父兄の願いではないか。新政策の重点から次第にこの〝すしづめ〟解消の声が消されていることが心配だろう。